

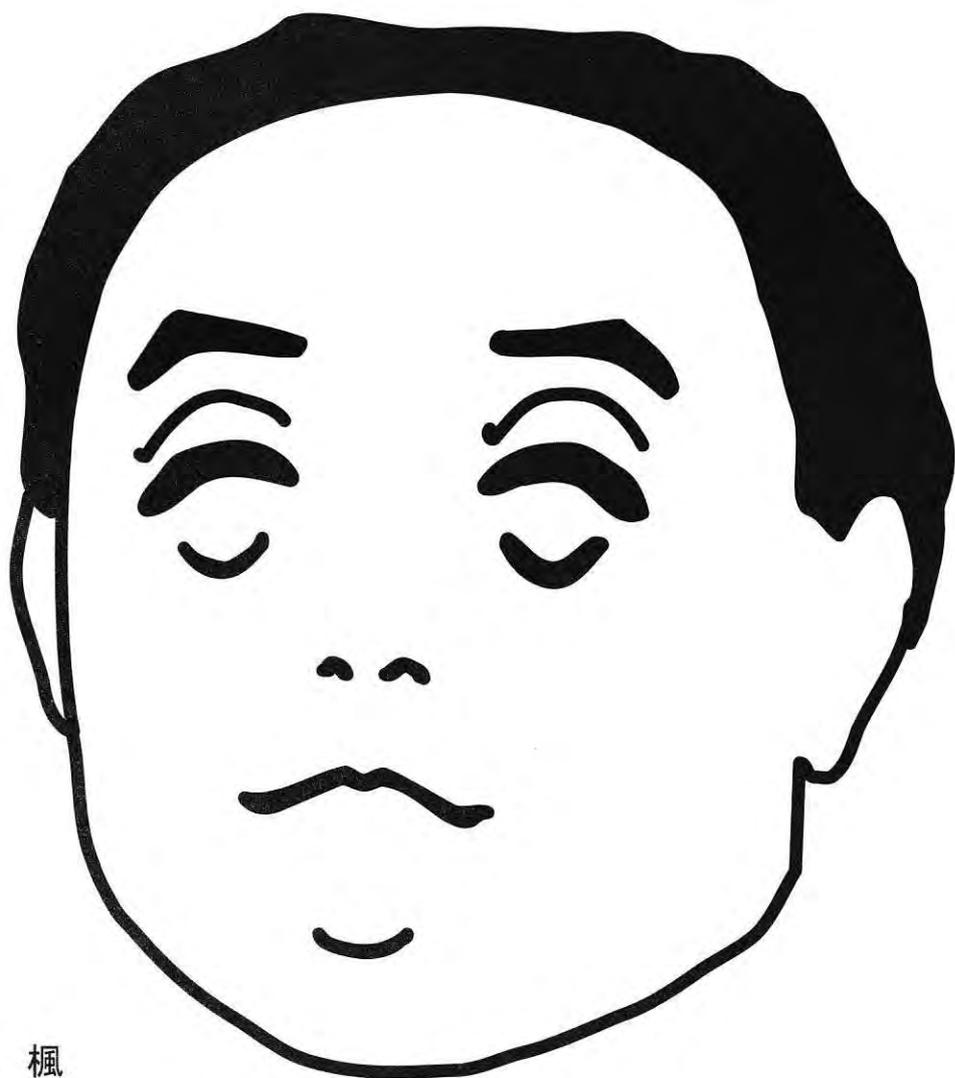
# 中村先生

## 追悼文集



# 中村先生追悼文集

く忘れられないあの笛の音



楓淳一郎作  
えろじの顔

S 4 3 ・ 3  
岩井合宿所にて



高校時代バイト先の  
野球チームにて



S 4 3 ・ 5  
関東大会会場にて





S42 追い出しコンパにて



S57 開成体育館にて



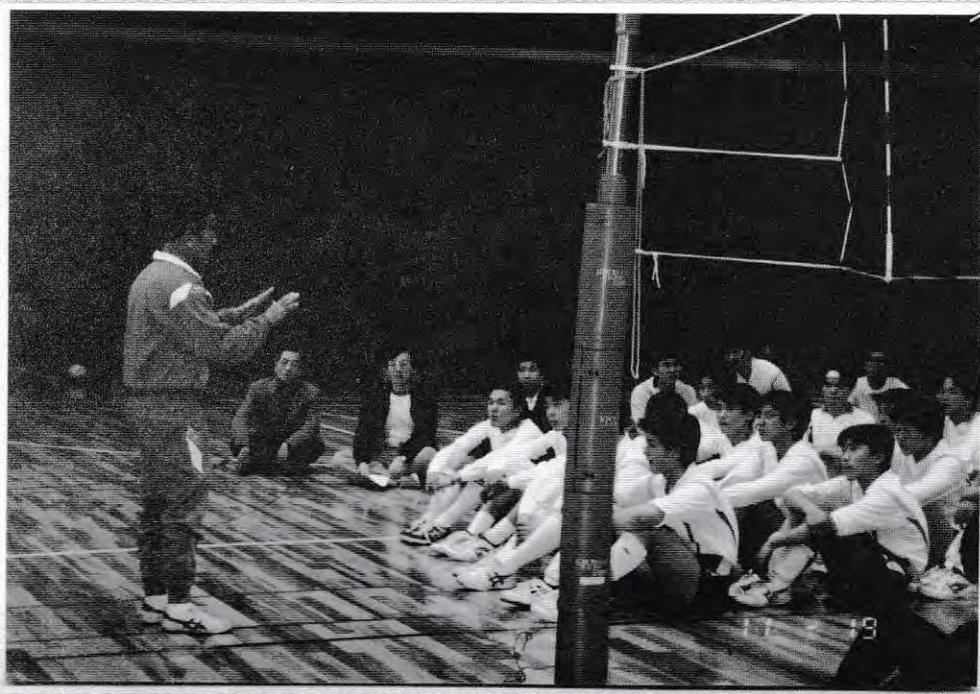
学園排球部創立30周年 記念ハ  
次先生国際審判員ライセンス取得

S50秋  
国際審判員ライセンス取得記念パーティーにて



S58  
開成体育館にて

開成麻布定期戦で話をする先生



H7夏 岩井合宿所海岸にて

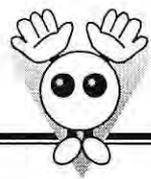


# 目次

豊島学院高校	図師透	1
麻布学園OB	谷山雅裕	2
開成学園バレーボール部顧問	栗原弘	4
開成学園バレーボール部顧問	奥山茂樹	5
元開成学園教諭・保健体育	伊藤清一	7
昭和二十六年卒	吉村功	9
昭和二十七年卒	安井高明	10
昭和三十八年卒	芥川修	11
昭和三十九年卒	鈴木康之	13
昭和三十九年卒	宮崎直樹	14
昭和四十年卒	佐藤勇	16
昭和四十一年卒	益田嘉直	17
昭和四十一年卒	西山祐二	18
昭和四十二年卒	片野清昭	19
昭和四十三年卒	結城教仁	20
昭和四十三年卒	冨部直希	22
昭和四十四年卒	片野昭秀	23
昭和四十五年卒	桑田起義	25
昭和四十五年卒	山本恵一	26
昭和四十五年卒	浜和男	27
昭和四十五年卒	長嶺義秀	29
昭和四十五年卒	竹内雄一	31
昭和四十六年卒	西村隆	32
昭和四十七年卒	後閑哲夫	33
昭和四十八年卒	矢澤俊彦	34

昭和四十九年卒  
昭和五十四年卒  
昭和五十四年卒  
昭和五十六年卒  
昭和五十九年卒  
昭和五十九年卒  
昭和六十二年卒  
平成二年卒  
平成六年卒  
平成七年卒  
平成九年卒  
平成九年卒  
平成九年卒  
平成十年卒  
平成十年卒  
平成十一年卒  
平成十一年卒  
平成十二年卒  
平成十二年卒  
平成十三年卒  
平成十三年卒  
平成十三年卒  
平成十四年卒  
高校三年生

松原秀彰	36
熊谷達範	39
関茂和	40
野澤和久	41
清水誠一	42
石賀和義	44
内田大介	45
小林哲緒	47
今井耕介	48
依田秀則	49
宮利政	50
市原将樹	51
金英寛	53
石岡宏太	55
楓淳一郎	57
川原尊徳	58
松尾佑樹	59
星野晋平	61
丸崎玲	62
下山真	64
井口喜弘	65
森禎三郎	66
中村智博	67
中村美知子	68



## 中村先生との思い出

豊島学院高校 図師透

先生の訃報の一報に「そんなー」と、自分の耳を疑った一人でした。先生の出会いがあつて、現在でもバレーボール界で微力ながらお手伝いできることに、深く感謝しております。

そんな思いから、私と先生との三十年に渡つての思い出を、綴らせていただきます。

昭和四十五年春、大学を卒業し、池袋商業高校の体育館での春季大会に、初めて監督として生徒を引率し、赴任の挨拶のため本部席に出かけたとき、最初に声を掛けていただいたのが、その当時第三支部支部長の中村博次先生でした。それ以来三十年間に渡つて大学の同窓ということもあつて、公私に渡つて目を掛けていただきました。翌年には東京都高体連の役員にも推挙を頂き現在があります。東京での結婚披露には、大会と重なりながら合間を縫つて出席していただき、スピーチまでいただいたり、大会や練習試合等では、監督・指導者として、又教員としての心構えについて、熱っぽく指導していただく等、多岐に渡つてお付き合いさせていただきました。

先生の文武両道を地でいく指導力に敬服し、恐れを省みず勝手にライバルと、させてもいただきました。

その当時、先生は国際審判員として、国際大会はもちろん国内最高レベルの大会（日本リーグ）等の審判員としても活躍されていた、先生からある日突然、「どうだ審判員の勉強をしてみないか」と言われ驚きました。しかし、我々の大先輩である藤田七郎先生（当時全国高体連審判委員長）の助言もあり、本格的に先生の指導を受け、審判員の道を進むことになりました。昭和五十年より十一年間、東京都高体連男

子部の審判委員長を務められてから益々先生との繋がりが深まり、A級審判員の資格を取得するまでに鍛え上げていただきました。合格の報告の折りは、自分の事のように喜んでいただき、西日暮里の居酒屋で、上級審判員の心構えについて、杯を交わしながら（先生は、ピールのトマトジュース割りが好物でした。）語り掛けていただいた日のことが、昨日のように鮮明に残っております。審判員としてお供したとき、風呂敷に包まれた審判服をスポーツバックから取り出し、おもむろに広げた風呂敷の中は、整然と折り目のついた白い審判服がそこにあったことが印象的でした。几帳面な先生の一面を垣間見ることができました。

高校生バレーボールの憧れである「春の高校バレー」の決勝審判を数多く務められた先生の推薦もあつて、多くの試合で貴重な体験の場を与えていただきました。その甲斐あつて、私も決勝審判を、経験させて頂くようになり、その時いつも先生は、心配そうに私の審判を見つめられていました。セット間等の合間に本部席の先生と目線が会うと親指と人差し指でマルを作つて「いいぞ、その調子で最後まで行け！」と、目で語りかけて頂いたことが、どれだけ力となったことか。試合後は、「よかったぞー」の一言だけでした。不安心っぱいの私に、何に増しても安堵感を与えてくれた一言で、その後の審判活動の大きな活力剤となりました。

副部長を務められてからも、先生からは面と向かつて叱られた事はなかったけれど、一言一言の裏には、常に厳しく、重みのある言葉ばかりでした。

先生、今でも「柚さん」（元明大中野高校監督で、バレー界での無二の親友）と、会うと決まって先生の昔話に花が咲いています。

ご冥福を、心よりお祈りしております。



## 中村先生を偲んで

麻布学園OB 谷山雅裕

開成OBでない私が本誌に寄稿させていただく榮に浴し、先ずは厚く御礼申し上げます。

### 出会いと別れ

中村先生と私の出会いは、四十年前私が中一の年の開成祭でした。

当時は、秋の開成祭と春の麻布文化祭で駒場東邦と三校リーグを組んでおり、当時の開成中学のアスファルトのアウトコートで、入部したての私に、「おい、君は皇太子（現天皇）に似ているな」と声を掛けていただいたのが最初の会話でした。

そして、昨年の三月国立医療センターにお見舞いに伺ったとき、

「俺はもうだめだ」とベッドから手を振られたのが、先生との最後の会話でした。

### 恩師

その間、四十年もの永きに亘り開成外の私を隔てなくご指導いただき、麻布にはバレーボール専門の先生がおられなかったこともあり、私にとつても中村先生はまさに恩師でありました。（開成の皆様には申し訳ありません。）自分の母校以外に恩師がいることは、密かに私の誇りでもありました。私にとって中村先生はそういう存在でした。

### 麻布との関係

開成、麻布の永い友好は、麻布にとつてまさに中村先生のお気持ちのこもった尊い遺産だと感謝しております。開成、麻布の間には、各クラブで何らかの関係がありますが、「これだけ永い間深い友情が継続しているのはバレーボールだけだ」というのが中村先生の口癖でした。

私もその口癖を誇りをもって引き継いでおります。

先生は、「俺は、麻布に負けるのが一番悔しいんだ。」とよく言ってお

られました。私は、数年前まで親戚のような開成との勝敗にそれ程のこだわりはありませんでした。しかし、最近私も「開成に負けるのが一番悔しい」と思えるようになり、中村先生の言われたことがよくわかるようになりました。これこそ本当の友情関係ということがわかりました。また、麻布が元氣のないときは、わが子のようによく叱咤していただいたことも昨日のこのようです。

### 審判

中村先生は、審判員としても国際審判員として世界のレベルでご活躍されましたが、私がまだ二十代のころ、先生が高体連の役員の中堅で、大会などでよく先生の審判のお手伝いをさせていただき、勉強させていただいたことがあります。そのときよく審判のこつを

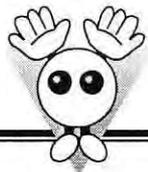
「疑わしきは罰するんだ」とご教授いただいたのが印象的でした。

但し、私も現在B級の端くれで吹いています。これだけはちよつと違うのではと今は思っています。

### 偉大な指導者として

ここ数年、残念ながらバレーボール人気は低迷の一途ですが、その中でも開成バレー部は驚くほどの多くの部員数を毎年維持し、しかも関東大会五回出場など素晴らしい実績を積み重ねておられることは、まさにスーパーチームと云えます。殊に、開成という特殊性（トップレベルの進学校で、スポーツが強くなりにくい体質）を乗り越えての伝統の力は、奇跡に近いものです。それを作り上げ、成し遂げたのは中村先生です。優秀選手をセレクション入学させている学校が強くなるのは当たり前です。開成、麻布のような選手を選べないチームを強くするの、真の指導者の力だと思っています。

バレーボール人気低迷してからの開成バレー部の底力に、中村先生の指導者としての偉大さを感じ、尊敬の念をつよくしております。



先生の最期に五回目の関東大会出場を果たしたことは、まさに中村開成チームの集大成であったと大いに賞賛したいと思います。

#### 五校リーグ・六校リーグのこと

高校の五校リーグ、中学の六校リーグの運営も中村先生と一緒にやらせていただきました。ワンマンな先生と他校を調整するのに苦勞もしましたが、先生がおられなくなって重しがなくなったような気がしています。

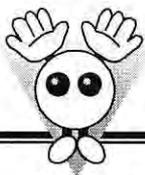
先生が亡くなって二度目の五校リーグ、六校リーグを迎えようとしております。おがましいですが、先生の替りをするつもりで私も頑張りたいと思っております。多分、私のやり方も直伝中村流かも知れません。

先生とのエピソードはまだまだ語り尽せないほどありますが、先生との思い出を大切にするために、小出しにして永くご披露して行きたいと思えます。

中村先生のバレーボールに対する強い情熱と遺志は、開成OBの皆さん、そして私にも受け継がれております。

中村先生に感謝しつつ、心からご冥福をお祈りいたします。

合掌



## 中村先生の思い出

開成学園バレーボール部顧問 栗原弘

中村博次先生との関りは、私の大学生時代に遡る。東京外国語大学でバレーボール部に所属していた私は、学部四年間、関東大学リーグの下位リーグでプレーをしていた。当時、東大では体育会の各々が合同で、毎年大阪外語大との定期戦を行っていた。大阪外語のバレー部顧問をなさっていた成川先生が審判部の仲間であつたので、東大の主催年に何度か審判として来ていただいたのが先生とのお付き合いの始まりであつた。最初にいらしたのが学部の六年生のときであつたから、私は既に現役を引退し、直接プレーを御覧いただいたことはなかつたのではあるが。

その後、大学院までずっとモラトリアムを決め込んでいた私が、三十二になつたとき、縁あつて開成に英語科の教員として来ないか、という話を頂いたときにも、当時英語科の主任であつた藤田先生ならびに田中校長に、外語大バレー部で二年間キャプテンをした男なら私が保証すると、お口添えを頂いたことを後に伺つて、ありがたいことだとあらためてバレーボールの取り持つ縁を実感した。

開成の教員となると同時に、当然のごとくバレー部の顧問として引つ張られ、今日まで二十二年間曲がりなりにも勤めてこられたのも、中村先生のご指導あればこそのごとであつた。

最初の年の夏合宿は長年続いていた磐井の民宿「前芝荘」だった。民宿の狭い体育館の脇にある棟が教員室で、中村先生と枕を並べながら、学校のこと、水泳学校のこと、部員のあれこれ、等々、話して頂いたことは忘れられない。三十代前半のその頃は、私も今よりずっとスリムな体形で、生徒と一緒にコートに入って練習ができていた。中村先生も当時は元気いっぱい、短パン姿でコートの傍らの椅子に腰掛け

られ、大声を上げていらした姿が目には浮かぶ。

先生が五十歳を過ぎられた頃だったか、ある日私に向かつて、「僕もこのごろ年のせいか体がきつくつてねえ。栗原さんに中学のほうを全面的に見てもらいたいと思うんだが、どうだろう」と遠慮がちに仰つたことがあつた。もちろん、即お引き受けしたのだが、先生としては、できることなら従来どおり、中高ともに御自分で指導し、やむを得ないときだけ私を使いたい、というのが本音だつたのだろうと想像する。バレーボールに対する情熱、思い入れ、部員に対する愛情は時には他への配慮を忘れさせることもあつた。試合場で審判の判定に激昂して食つて掛かり、いつレッドカードを出されるかと冷や冷やすることも再三あつたし、他校の監督は殆どが後輩だつたり審判部の教え子だつたりということ、我俣を押し通す場面にも何度か遭遇した。後でそうした人たちから話を伺うと、「相手が中村さんじゃあしよがないや」となかばあきれ、なかばあきらめの言葉が出るのが常であつた。

晩年、心臓を悪くされてからも、周囲を心配させながら、試合に、合宿にと体を酷使され、「先生少し休んでください。もつと私を使つてください」と申し上げても、「栗原さんは学年主任で大変なんだから」と、いつかな聞こうとはなさらなかった。冬のさなかの試合にも無理をして来られ、心配した麻布の谷山さんから「早く帰さなきゃだめだよ」と言われて無理にお引取り願つたこともあつた。

亡くなられて二年が過ぎようとしている今、部活動のこと、生徒会活動のこと、生活指導のこと、先生が長年培つてこられたノウハウをもつともつと伺つておけばよかつたという思いに駆られる。特に、生徒、卒業生の一人一人の個性を的確に把握しかつ克明に記憶していることは驚くべき能力で、その何分の一かでも受け継いで行けたらと願っている。



## 博次先生に教えられたいくつかのこと

開成学園バレーボール部顧問 奥山茂樹

私にとって、博次先生との最初の思い出は、バレーボール部顧問への勧誘であった。専任として就職してすぐの頃、四月の終わりか、五月の始めかすでに忘れてしまったが、いずれにせよ、運動会前のことだった。旧校舎の中学教員室の一角で、博次先生に呼び止められた。「先生、ちよつと、お話があるんです」

当時バレーボール部の顧問をしていたのは、博次先生と栗原先生のお二人だけ。今から思えば、さぞ大変だったことだろう。その年に入ってきた新人は、私を含め二名。もうひとかたの先生は、剣道経験者ということで剣道部顧問になることが早々に決まっていた。こうした人材難であったとはいえ、スポーツ経験のない、おまけにバレーボールの観戦経験すらも中三の体育の授業で一度きりという私を勧誘されたのは、よほどお困りだったからに違いない。

博次先生は一通りバレーボール部の現状を説明された後、左斜め前から私の耳元に近づいて、殺し文句を囁いた。

「私、心臓悪いんですよ。嫌とは言わないでください」

この日から、私とバレーボール部との長いお付き合いが始まった。

博次先生にお声をかけられる数日前、バスケットボール部の桜井守先生からも、部活の顧問に関するお話を受けていた。バスケットボール部は、当時から桜井先生を含めて四人の顧問がいたのだが、桜井先生以外の三人は、他の運動部との掛け持ちがあったり集中講義の準備があったりで、必ずしも毎年合宿に行けるわけではない。大所帯の運動部の合宿では、怪我人や病人を病院へ連れて行ったり、一日付き添ったりする教師も必要なのだが、現状ではとても人手が足りているとは言えない。新人が部活の顧問を決めるには時間がかかるだろうから、

とりあえず夏合宿に来てみて、気に入ったら来年までに顧問になってくれると有り難い。というお話だった。この話を聞いていたので、私は、部活の顧問というものは一年ほどかけてゆっくり決めればよいものと思っていた。あのような形で即断を迫られることなど、考えてもみなかったのだ。

博次先生からのお話を受けてすぐ、私は桜井守先生に事情を説明した。人手不足という点ではバレーボール部のほうが緊迫してはいたが、バスケットボール部はとりあえず先約である。何と言われるかと思っていると、「中村先生にそんな風に言われたんじゃあ、仕方ないね」と、こちらが拍子抜けするほど簡単に引いていただいた。ただ、バスケットボール部の現状が厳しいことは変わらないので、合宿だけはできればサポーターしてほしいとお願ひされた。幸いにして、バレーボール部とバスケットボール部は、合宿日が重なることはない。私の夏休み中の仕事が増えるだけですべてが丸く収まるのなら、それもよいだろう。よく驚かれる、バレーボール部とバスケットボール部の合宿の掛け持ちは、このようにして始まった。

バスケットボール部の合宿では、私は、名実ともに「怪我・病気対策要員」であり、怪我人さえ出なければ、練習中も部屋で好きな仕事をしていた。体育館には桜井守先生が常に張り付いておられるので、何の心配も要らない。ところが、バレーボール部の合宿では、練習中もずっと自分自身が体育館に張り付いていなければならないので、その間他の仕事はほとんどできない。仕方がないので練習を見ているわけだが、経験のない私にとって、それは簡単なことではなかった。

最初の数年間は、どんなに一所懸命観ていても、何がどうなっているのかさっぱりわからなかった。長い練習時間はひたすら退屈で、苦痛でさえあった。最近になって、ようやくある程度まではわかるように



なってきたのだが、自分でやったことがないせいかな、今度は悪いところばかりが目につくようになった。野球の素人がプロのプレーに文句をつけるように、やったことがないからこそ、生徒たちの稚拙なプレーが気になってしまふのだ。

そんなときに、博次先生の指導ぶりがとても参考になった。私は経験者ではないから、博次先生のようにサーブやトスの手本を見せることはできない。だが、どんな場面でもどこを注意すれば効果的なのかを、懸命に盗み取ろうとした。とても真似のできないことも多かったが、中には私にもできそうなことが含まれていた。博次先生はまた、どういう状態のときに生徒がどう感じているのかを、時々解説してくださった。それがどこまで正しいのかを確かめる術はなかったが、バレーボールプレイヤーのものの感じ方、考え方を知る礎にはなった。私は今、曲がりなりにも「指導の真似事」ができているとすれば、それは博次先生から間接的に伝授されたもののお陰である。

今では、博次先生の代わりにOBコーチの皆様から、いろいろご教示頂いている。有り難いことである。

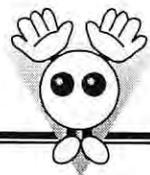
博次先生とのお付き合いの中でいちばん印象に残っているのが、平成十二年卒、橋本学年との高一旅行である。博次先生は七組の組主任として、私は教科担当として同行した。最終日、今まで皆を乗せてくれたバスを降り、教師も生徒たちも続々と駅に向かっていった。私は、同乗したバスの中に忘れ物やごみがないか、最後の点検に手間取り、少々出遅れてしまった。ガイドさんと運転手さんにご挨拶をして、駅に向かおうとしたところで、博次先生を見つけた。

博次先生は、ご自分の乗っていたバスだけでなく、開成の生徒がお世話になったすべてのバスを回っておられたのである。さらに、生徒も教員も皆次の集合場所へと移ってしまった後であるにもかかわらず、

すべてのバスが見えなくなるまで、一台一台の運転手さん、ガイドさんに対し、深深と頭を下げて礼をし続けたのだった。私は驚きながらも、その間ずっと、博次先生のお隣に立って一緒に頭を下げ続けた。すべてのバスが行ってしまったと、博次先生は、「昔の人はね、こんな風に、最後の最後まで配慮を忘れないものだったんですよ。こういう美徳がなくなってきたのは寂しいことだね」と仰った。

このときのエピソードは、私にとつて、教師として如何に行動するべきかを考える際の原点のひとつとなつている。現実には、部活の引率の場合、宿についてすぐに顧問によるチェックインの手続きが必要であったり、最近では修学旅行でも分刻みでスケジュールが組まれていることも多く、なかなか最後まで見送ることもできないでいる。だが、そうしたという気持ちがあれば、どのように感謝の意を表すか、どのようにすれば気持ちよく帰っていただけか、といったことは、自ずと見えてくる。とりわけ、生徒たちが多大なご迷惑をおかけしたであろうことが明らかなきほど、博次先生の教えが有り難く胸に沁みるのである。

博次先生は、同僚には厳しい方であった。教務職員の方々や教務係の先生方に無理難題を押し付けることも決して少なくはなかったし、他校のバレーボール部の先生方や大会役員の方々ともよく衝突されていた。だが、そうした行動の基本には「生徒のため」という大原則があり、このほうが生徒のためだと思えばどんな無茶でも教職員は行うべしという固い信念があった。博次先生は生徒たちにとっても人気があったが、それは、彼らが先生のそういうところを見抜いていたからではないかと思う。病床においても、いつも生徒のことばかり考えておられたというのは、実に博次先生らしい生き方であった。



## 中村先生を思う

元開成学園教諭・保健体育 伊藤清一

・生涯を現役で、真剣に勝負された先生。  
・功績の評価が分かれる先生。  
・自信と、慢心とを同居させておられた先生。  
こんな思いを抱くのは、私だけでしょか。  
話題の絶えなかった先生だけに、開成学園に残されたご功績は計り難く、学ぶことも沢山ありました。深く敬意を表し、「有り難う、ご苦労さんでした」と繰り返し返さずにはおられません。

平成十三年五月十日、国立国際医療センター南病棟十階一〇一室二時、先生が病室にお一人でおられるところを、「おーい、中村先生」と、低い声で呼びかけました。両手で先生の右手をがっちり握り締めた瞬間、目を開けられ、やや表情が軟らいだかに見えましたが、間もなく目を閉じられました。先生は「おじいちゃん」と微笑みながら呼びかけているようなお孫さんの大きなお写真に見守られています。また、卒業生の方々の、来院お見舞メッセージの書かれた大学ノート数冊から、「先生、早くお元気になってください」と励ます声々が聞えてきそうな病室で、私だけが語りかける会話が小一時間におよびました。  
中村先生は、昭和三十四年二月二十三日に他界された真島綱夫先生の後任として、昭和三十四年四月一日に就任なさいました。先生はすでに、母校日本体育大学の助手としての勤務が決まっておられましたが、故上迫忠夫先生のご説得により開成への就任を決意され、それ以来実に、四十二年二月の長きに亘るご勤務となりました。この間、同僚として友として、長きお付き合いをしていただきました。  
先生は、私が座右の銘としております「水題」を見事に実践され、模範を示して下さいました。

一、自から活動して他を動かすは水（中村先生）なり。  
何事にも積極的に行動され、校務にしても、学校行事にしても、敬遠したいような職務を率先して長く担当して下さいました。

クラブ活動、集団行動についても同様であり、中村先生にお任せしておけば大丈夫と、先生方の信頼を得ていました。

また、校舎の内外を問わず、お独りで、黙々と掃除をなされている姿をしばしば拝見し、私もかくあらねばと言いつつも聞かせ、生徒指導にもあたりました。

一、障害に遭って激し、その勢を百倍するは水（中村先生）なり。

どんな障害にも苦境にも屈することは決してなく、行動で示して下さいました。

校外補導で一緒にしたことがあります。盛り場での生徒補導はもちろんのこと、通行者に対しても、生徒の範とならない行動には断固注意され、ひやひやする言葉のやり取りもありましたが、決して妥協することはありませんでした。この勇氣ある言動は、現在の日本の大人が学ばなければならぬ貴重な態度でした。

一、常に己の進路を求め止まざるは水（中村先生）なり。

「先生の一言の激励で、クラブ活動を続けることができ、大学進学にも初志貫徹することが出来ました」と、しばしば耳にすることがありました。生徒の適性を見極め、人間味溢れる指導によって進路目標を立て、その目標達成の努力を掘り起こすという先生の指導力には、感銘しております。

先生自らも猛勉強され、国内外で数多くの実践を積み、バレーボール国際審判員の資格を獲得なさいました。先生の真摯な努力には頭が下がります。

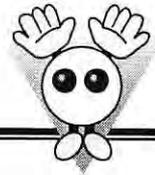
先生の訃報に接しましたのは、「おーい、中村先生」と呼びかけてか



ら二週間後のことでした。覚悟はしておりましたものの、世の無情を肌を感じながら、黄泉の旅は安らかであれよ、と、ご冥福を祈らずにはおられません。

合掌。

先生について書きたいことが余りにも沢山ありますのに、しかし、いざ書こうと思うとなかなか纏まりません、追慕がつきない先生に出会えた幸を、人生の最大の誇りとしております。



## 中村先生を偲んで

昭和二十六年卒 吉村功

私は昭和二十六年卒業ですので、顧問の先生は岩谷先生でした。その後、伊藤先生、上迫先生に続き中村先生にお世話になりました。

中村先生と初めてお会いしたのはいつのことだったでしょうか。(三十年代後半だったと思いますが)開成の庭で「吉村です」と申し上げると、「存じております」といわれました。

そのときにこやかな顔と、「どうして知っておられたのか」という事が未だに私の心の中にあります。

創部時代のバレーボールはまったくバレーボールを知らない生徒の集まりでした。コーチも居らず、自己流で練習をして居ました。それでもバレーボールの好きな連中の集まりでしたので、高三の時はそこそこ強いチームになっていました。

そんなチームに大学でバレーボールを経験した中村先生がこられました。そして基礎から御指導をしてくださいました。

岩井での合宿の折、部員獲得の話になり、中村先生は体の大きさに比べ足の大きい一年生を探すのだと言っておられました。そういう奴は、将来必ず背が大きくなると言われ、なる程と思ったことがあります。

その時と思いますが、生徒のご父兄から受験が心配だからと退部の相談を時々受けるが、途中退部したものがその後良い成績に終わることは少ないと申されておりました。それは、時間の管理がルーズになり、また体力もなくなるからというご意見でした。

この言葉は将来社会にでてからも通じることと、頓に心においている考え方でもあります。長い間本当にバレーボール部のためにお力添えいただき、ありがとうございました。



## 今、振り返って

昭和三十七年卒 安井高明

今年は無年で、私の干支です。満六十歳を迎えます。中村先生にお会いしたのが中学三年の時ですから、今から四十四年前になります。人生をおして一番長いつきあいでした。その時は若輩の十五歳でした。その先のことなどは想像もしませんでした。

赴任された先生はまだまだ若く、とてもきびしく、血気さかんでした。高校時代は普通の指導を仰ぎました。又、五校リーグ戦を作ったのも我々の世代です。卒業してからは文化祭に行つて顔をだして、終わつてから先生と語り合いました。大学を卒業してからは、就職が大阪だったのではらくはご無沙汰してしまいました。

本當の付き合いはOB会の会計を引き受けてからでした。赤字體質を黒字にもつていつて現役に幾らかでも応援したい。常に会うと先生からは「頼むぞ」とはっぱをかけられました。みんなの協力もあり、財政の立て直しができました。もうそろそろ会計も若い世代にゆずり、引退しようと思いました。OB会、中村先生の薦めもありOB会の會長をつとめることになりました。

先生との打ち合わせは「あ・うん」の呼吸です。「いいな」「頼むぞ」です。

現役の時、ほとんど何もしないで、卒業してからバレー部に貢献できて幸せです。

体育館に行つて着替えないと「おれのを貸すから着替えてこい」、腰痛でできない時も、「もっと体を鍛えろよ」と言われました。

先生本人はどうだったのでしょうか。

休みもなくバレー一筋、頭にあるのはバレーボールのことだけです。バレーとはなれて、先生と温泉旅行に行きたかった。そして、もっと

もっと語り合いたかった。人生の教訓を学びたかった。

最後にお会いしたのが、二年前の三月四日です。道路は前日降つた雪が積もつて寒い日でした。

ベッドの上で先生は「よう来たな、元氣か、娘さんはどうした」、こちらからは「先生こそ元氣をだして頑張つてください」とかたりかけました。

話題は常に四十年前に戻つてしまいます。最近のようではありません。別れる時は先生と握手をして、「次は私の還暦（十二月六日）まで元氣でいてください」と約束しました。中村先生がおられないのが残念でなりません。

天国で見守つていてください。



## 中村先生赴任当時を振り返る

昭和三十八年卒 芥川修

中村先生とは四十二年間のお付き合いをさせて頂きましたが、振り返ってみると、私にとつて一番印象が深いのは、先生が開成に赴任した当時の事です。先生が開成に赴任したのは昭和三十四年四月、私が中学三年の時でした。当時中三のチームは中学生としてはかなり大柄なのが何人もおり、人数も揃っていたため先生としては魅力を感じたようでした。当然の事ながら、赴任したばかりで先生も燃えていたのでしょう、気合が入っていました。それからの練習は全てが様変わりしました。

私は正直なところ、君は何でバレーをやっているの？と聞かれても特別な思い入れはなく、遊びの延長でしかありませんでした。中学二年生の時、当時の顧問だった上迫先生に「芥川……お前、背が高くて馬力があるしジャンプ力も随分あるじゃないか。バレーをやってみんかい！」と誘われました。「ヘルシンキオリンピックの体操で銀、銅メダルを取った世界の“上迫”からおだてられたものですから、二つ返事で入部しました。」

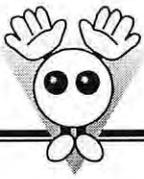
当時の練習は腹筋、ウサギとカメ（ウサギ跳びは膝に悪いと今は禁じられていますが）などで苦しい事もありましたが、所詮は進学校の運動部で、趣味の域を出るものではありませんでした。中にはミスをするや青竹持つて追いかけてくる先輩もいましたが、ご愛嬌で鬼ごっこをやっているような感覚でしたから、厳しい感じは全然ありませんでした。

そんなところへ新任の中村先生が来られたわけです。最初は上迫先生の後輩というのだから別に何も変わらないだろうと高を括っていました。大学でバレーをやっていたにしては背が高いわけでもなく足も短

いじゃないか、これで本当にバレーをやるのかね？というのが第一印象でした。

しかし、すぐに状況は一変しました。先生が口癖のように最後まで言われていた事です、「お前ら図体のでかいのがそろっていたけど、最初は準備体操一つでできなかったんだからな！」から始まって、それまでの全てが否定されました。練習がきつくなったという印象はそれ程ありませんでしたがバレーをやる考え方を強く指導されたと思います。我々はまだそれほどアレルギーはありませんでしたが、上級生、先輩はかなり抵抗したようです。前顧問の上迫先生はバレー部のほかに体操部も見られ、世界の“上迫”としてのお仕事もあつたのでしよう、そう何時もは我々の練習に出て来られた訳ではなく、殆ど上級生と卒業生の指導のもとに練習しており、雰囲気はのんびりとしたものでした。ところが中村先生は我々より先にグラウンドに立っていて、大きな声が最後まで止むことなく続き、なんて熱心なんだろうと呆気に取られる思いでした。根本的にバレーに対する考え方を改めさせられ、私にとつては正に黒船来航といった状況で、永い眠りから無理やり覚まされた感じで、体育教官室でお叱りを受けることが頻繁になりました。但し、何時も矢面に立ったのは皆さんご存知の親愛なる山本八チャンで、私は何時も後ろに隠れていたのではありませんでした。

先生の叱り方は各人の性格等を考えての事なのか相手により夫々違いました。私の場合は何故か先生から直接叱られた覚えが殆どありません。こいつは叱ると滅入ってしまう性格だとも思われたのでしょうか。ただ一度覚えていたのは、東京都二位とか言う触れ込みの文京九中を招待して試合をした時、中学生にしてはすごいおっさんみたいな奴等ばかりで勝てるわけ無いと思いつつながら試合を始めたところ意外



にも調子よく勝ってしまった為、私も凶に乗ってサーブの時に相手を舐めた態度を取ってしまった。試合後、勝って褒められるとばかり思っていたところへとんでもない雷が落ちました。「相手を馬鹿にしたあの態度は何だ！いつものお前の態度じゃない、がっかりしたぞ！」と真剣に怒られました。しかしその時でも他には誰もいない所でした。打たれ強い？と思われる者は幾度と無く皆の前で叱り付けていた訳ですから、中村先生流の考えた叱り方なのだと思います。叱り方の使い分けは私も社会に出て部下を持つようになってから十分参考にさせていただきました。

背筋を伸ばし、気力溢れた指導をされていた先生の姿は、赴任当時から最後まで変わりませんでした。私にはとても真似の出来ない生き方だったな！……と思いつつ、中村先生のご冥福をお祈り致します。



## 先生の死を悼む

昭和三十九年卒 鈴木康之

私は、小学校のころはその当時の先生の影響でバスケットボールをやっておりました。ところが、成長盛りに激しい運動をやりすぎたために、膝の骨が出て、座ることも出来ないほどの痛みに襲われ、手術をしました。開成中学に入学し、足の痛みもなくなり、またスポーツをやりたいという気持ちになりました。

一年の間は何をやるかと考えておりましたが、小学校の先生の助言で左右同じように発達するスポーツの方が良いとのことで、バレーボールを選択しました。そして二年からバレー部に入り、中村先生と出会いました。当時中村先生は大学から来たばかりで非常にはりきっておられ、ご自分から皆を引っ張って鍛えておられました。当時一年上の先輩たちは非常に強く、九人全員レギュラーで占めておりました。先生も若く開成のバレー部を強くしようと一生懸命でしたので、多少先輩たちとぶつかるところはありましたが、バレー部を強く、勢力を伸ばすことに全力を注いでおられました。開成が勉強だけでなく、スポーツでも強くなり、質実剛健、文武両道の精神を実践しようと思われていたのだと思います。我々が中三になると、飯塚先輩にコーチを任せ監督として采配を振るわれるようになりました。先生のパフォーマンスは豊かで皆を引っ張って行き、試合での采配は見事でした。

当時対外試合に出かけ、十五・六連勝し、私学祭では優勝できる力のあるところまで成長させていただきました。(残念ながら私が準決勝で手首の捻挫で退場し、負けてしまいました)

そんな中で先生は公認審判員の資格を取り、対外的な分野でも実力を発揮され、開成を引き上げる努力をされました。

高校時代、当時最強の中大付属杉並高校と監督同士の関係で練習試合

をやらせてもらいました。当然菌が立つ相手ではありませんが、先生の顔で付き合ってもらいました。人数不足で当時中三の片野くんをハーフセンターに据えて戦いましたが私のスパイクが何本か立て続けに決まったら、中大杉並の中村先生が選手たちにコートの中を何回もスライディングさせておられました。

また、東京オリンピックのときの予選会に井上くんを出してもらいましたが、これもよい思い出として残っております。

今、結城くんがOB会会長としてご苦労されておりますが、中村先生は自分の手で育てた生徒たちがOB会を背負ってもらいたいという気持が強く、世代交代をいつも言っておられました。そう言う意味では今の体制は非常に若返り、活発になつて頑張つておられると思います。

中村先生は気性も激しい先生でありましたが、開成を愛し、バレー部を愛し、開成のバレー部とともに歩み一生を終えられたと言つても過言ではないと思います。その陰には優しい奥様の内助の功があったからこそと思います。ご冥福をお祈り申し上げます。



## 中村先生と私

昭和三十九年卒 宮崎直樹

先生が亡くなられてもう一年半が経つ。先生は六十七才で亡くなられた。バレーボールで我々を指導し、育て上げていただいた頑強な体なのに。心臓病から回復することができずに。

先生は平成二年の暮れ、私の結婚式に仲人としてご臨席賜った。その数日後に、最初の発作を起こされ、救急車で入院された。

先生は式の何日か前から風邪をこじらせたようで、咳がひどかった。しかし式の当日はびたりと咳を止めて仲人としての勤めを百パーセント以上こなされた。体調が悪いつきに無理をおかけしてしまったのではないかと悔やんでも悔やみきれない。

私は中学一年のときに、父が他界した。従って、父のいない青少年時代を過ごした。中学二年の秋にバレー部に入部した。顧問は前年度より開成に赴任された中村先生だった。純真な中学生の私は初めての部活動であるバレーをへたくそなりに夢中でやった。

先生をはじめ諸先輩方は厳しい以上に優しい人たちで、人生の全ての部分を指導していただいたような日々であった。

大学に進学したあとも私から先生にお願いしてアルバイトを御紹介いただいた。そのような中で、私は無意識のうちに、先生を父のように感じていたのかもしれない。

大学生時代、そして社会人になったあとも、OBとして夏の合宿に、OBチームとして区民大会への出場、親睦試合、会計係等とバレー部OB会への活動は、わたしにとってなくてはならないものとなっていた。その中で先生とのお付き合いも多く、一緒にお酒を飲んで、先生のお宅に泊まらせていただき、深酒で天井がぐるぐる回る思いをしたこともあった。

平成二年の暮れ、四十四才になって初めて私は結婚式を挙げた。なんのためらいもなく先生に式のお見舞いをお願いした。会社の上司の方が、と人に言われもしたが全くそのつもりはなかった。若いころから先生にお願ひする、と私は勝手に決めていたのである。

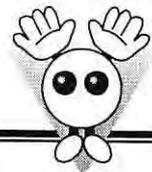
先生は少し驚かれたようであったが、快諾していただいた。披露宴会を同期の鈴木にお願いし、安井先輩、山本先輩にも出席をお願いした。先生はそれをお聞きになると、井上や佐藤や片野も呼ぼうじゃないか、と意気込んでおっしゃった。こうして皆様にご出席いただき、私にとって感激の式を挙げさせていただいた。

新婚旅行から戻って初めて先生が入院されたことを知った。私はびつくりして国立第一病院にお見舞いに伺った。ベッドの上に座って話が出るほどに回復はされていた先生は、少々照れくさそうな感じで、ご自分の入院の経緯や病状をお話してくださった。

先生はまもなく退院され、徐々にだが、体育の先生のお仕事にも戻られた。以前通りのフアイト溢れるスポーツマンの動きは無理にしても。その後、先生は全く普通にお仕事やバレー部のことをおやりになられた時期もあるし、再び入院された時期もあった。

私にとってはなによりも、あれほど祝福していただいた私の結婚自体がすぐに破綻してしまい、これを先生にご報告せねばならなかったとき、どれだけ先生のお気持ちを悲しませたことであろう、そして悲しませ続けたであろう、ということが悔やまれる。どれだけお詫びしても、お詫びしきれないことはない。

先生は亡くなられたとき、お棺の中でネクタイ姿でおられた。奥様にお聞きすると、最後まで仕事に行くのだ、と頑張っておられたそうである。先生は病に倒れ、どんなにご無念であったろう。それでも最後



まで前向きに、志を果たす姿勢を、開成精神を、身をもって我々に示してくださいだったのである。

先生は私の真面目過ぎる個性に、いささか辟易されていたと思う。同時にその野暮臭さの部分に共感を持っていたいて、四十年間もの長きにわたつてともに歩み、お付き合いもただけなものとは信じている。私は仕事柄、車で走り廻ることが多いが、日本アルプスや富士山を青空のもとに望むようなとき、南神城や山中湖での合宿を、若き日の先生やバレエ部の仲間たちとの日々を、不思議と昨日のことのように思い出す。そしてそのような日々が持てたことを幸せに思う。

中村先生、先生が育て上げた開成バレエ部を、いつまでも見守ってください。



## 中村博次先生へ

昭和四十年卒 佐藤勇

「ばかもん」何度このことばを聞いたことでしょうか。ある時は笑いながらやさしい「ばかもん」、またある時はビックリするような大きな声で本気に怒ってくれる先生でした。

心臓を悪くし、入退院を繰返しておられました。平成十三年五月二十五日ついに帰らぬ人となってしまいました。

あんなに元気だった中村先生が、こんなに早く逝ってしまうなんて。いつか元気になって、また開成バレー部と一緒にプレーすることを楽しみにしていたのに。残念でなりません。

先生との四十年以上のお付き合いは、私が中学一年生に入学した昭和二十五年四月に始まりました。ちょうど同じ時に奉職された中村先生がバレー部の顧問となられ、私たちの学年が最初の新入部員でした。バレー部に入部した私にとって、いつも生徒より先にグラウンドに出て、大きな声で情熱あふれる指導をされる先生の熱心さに圧倒され、そしてバレーに魅せられていきました。

グラウンドでの厳しい練習、練習の中での叱咤、時にはゲンコツが飛ぶこともありました。でもその中に中村先生の大きな『愛』を感じていました。それが厳しい練習に耐える力を与えてくれました。

また先生は一人一人の部員の個性を良く見ていて、その子どもに合った育て方をなさいました。バレー部には名プレーヤーと共に多くの名マナージャーが育っています。

先生の理想としていたバレーはけっして派手なバレーではありません。「拾って、拾って、つなぐ」粘っこいバレーでした。現在の私の粘

り強さは、このときに身に付いたものだと思います。

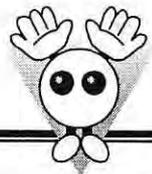
入院されてからも、「バレー部は栗原先生と卒業生で練習を見ますから、先生はゆつくり養生して下さい。奥さんやお子さん・お孫さんにとつての役割はだれも替わることはできないのですから、長生きして下さい。」とお願ひしたことがあります。すると「オレは細く永く生きたいとは思わない。いつも生徒と接しながら太く短く生きたいんだ。」と言って頑として言う事を聞きません。そして少し身体の具合が良くなると、学校に出たり、試合に行ったり、そして太く短い人生をこんなに早く終わりにしてしまいました。

残念ですが、これが中村先生の生き方だったのでしよう。

わがままで手のかかる先生でしたが、私達にとって、とてもとても大きな存在でした。

先生の『愛』をわれわれ卒業生が伝え続けていきます。天国から見えてください。もし忘れそうになったら、また大きな声で「ばかもん」と怒ってください。

中村先生のご冥福をお祈りいたします。



## 中村博次先生へ

昭和四十一年卒 益田嘉直

私がバレーボール部に入部したのは、中学一年の秋頃です。放課後、友達とグラウンドで遊んでいた時に、中村先生に声を掛けられたのが切っ掛けで入部したのを記憶しています。当時、私はひよる長く、多分目立つ存在だったのですが、先生が熱心にバレーボールの面白さをお話していたのだと思います。

ところで、私は中学生の頃に、開成祭の最中に部室荒らしに逢い、皆がお金や貴重品を盗まれた体験を持っています。私はこの時、父が何かの記念に貰った時計を着けていたので、それが盗まれてしまい大変落ち込みました。ところが、先生は自分の時計を私に手渡しながら、「これを持って帰りなさい」と言いましたので、仕方なく先生の時計を持って家に帰りました。私の父は、そんな中村先生に非常に恐縮し、結局その時計は先生にお返ししたのですが、父は時計のことより、「開成には素晴らしい先生がいるなあ」と、しきりに感心していたのを今でも覚えています。

私自身、この年になって、まあ何とか元気で仕事を続けられるのも、中村先生やバレー部のお蔭だと感謝しております。熱血漢で生徒思いの先生にはもっと長生きして欲しかったです。先生のご冥福をお祈り申し上げます。



## 中村先生をしのんで

昭和四十一年卒 西山祐二

私の開成時代の思い出のひとつの面は、バレー部の六年間と強く結びついています。その六年間、プラスOBとして参加していた大学生時代の数年間のうち、やはり、合宿についてのさまざまなことが、折に触れて思い出されます。時として記憶は順不同で、記憶違いがあるかもしれないませんが、南神城(白馬村)の合宿が、私にとっては、最初の合宿でかつ印象深いものでした。中一と中二の時の夏休みには、那古船形での水泳部の合宿に参加したため、中三の夏が最初の夏の合宿でした。新宿駅から夜行列車にのり、松本経由で大糸線をたどり、青木湖を車窓から眺めながら、南神城(当時は無人駅だった)まで、あの頃はどのくらいの時間がかかったのでしょうか。

信州の夏、白馬の夏は、柔らかで白い砂のグラウンドと、強い日差しと青空が、絵のように思い出されます。日の光りは強いのに、日陰はびっくりするほど涼しくて、グラウンドの周りには、トマトなどの畑があつて、民宿の前や畑の周りを巡る小川の水の冷たいことには驚きました。民宿の近所の雑貨屋ですつぱい青りんごを買って食べたことや、合宿の期間途中で帰京する先輩の見送りに、南神城駅で花火をあげて氣勢をあげたこともありました。合宿の期間中に、中村先生のアレنجで、近所に同じように合宿に来ていた都立高校の女子バレー部と開成中学男子で練習試合を行ったこともありました。

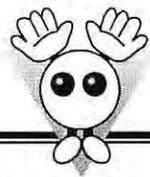
私の記憶の中では、バレーの合宿や練習の中の中村先生は、日に焼けて黒い顔に、小さい目をして登場しますが、なぜか、あまり大きな印象を残していません。印象が大きくなったのは、むしろ、OBとして先生と話す機会が多くなってからのように思います。

先生と話すとき、あるいは、先生と、先生を囲むOB達とで話すとき

には、なぜかというより必然的に、それぞれの年代の部員の思い出と、合宿、試合のエピソードになっていくのが定番でした。そこでは、いつもの話がいつものように繰り返されるといふ面と、いつ聞いても、そのつど新鮮な、あー、あの時はそうだったのか、生徒側からはわからなかった事情や、開成の教諭あるいは教育者としての先生の見方はそうだったのか、と思うことの両面でした。

個人的で、活動的で、かつ開成的であった、中村先生は、私の開成時代を有意義にしてくれた大切な登場人物のひとつです。先生の表舞台からの退場はまことに残念ですが、いつまでも、忘れることはないと思います。

すこしまとまらない文章となつてしまいましたが、追悼の文とさせていただきます。ご冥福をお祈りいたします。



先生、いろいろありましたね

昭和四十二年卒 片野清昭

(先生、無茶ですよ)

中学二年のとき、高校生が当時の高校のトップチームでした中大杉並(今の中大付属)と練習試合をやるということで球拾いのつもりでついていったところ、突然先生の「メンバーチェンジ、お前ハーフセンターだ!」という一声で身長百四十センチあまりの中学生が高校生の間に入って試合をすることになったのです。しかもあとで知ったのですが相手には後に全日本のメンバーになった選手もいたのです。今となればいい経験をさせて頂いたことになるのですが、当時はなんだかずいぶん無茶なことをさせられたという思いでした。

(先生、いつも気に掛けてくれましたね)

弱小チームでしたが大学でもバレーを続けました。インカレの一回戦で負けてしまった時、いつの間にか傍に来てベンチにいた私に「お前が出ないと駄目だな」と声を掛けて下さいました。その後学校に残った関係で現役の面倒を見ました。入れ替え戦で昇部を決めたときのことです、「おめでとう」という声に振り返るとそこにも先生の笑顔がありました。バレーをやっている限りはお釈迦様の手のひらの中、という錯覚に陥ってしまうような感覚がありました。本物の仏様になれるには早すぎたと思うのは私だけでは無いでしょう

(先生、有難う)

先生とのお付き合いが始まって四十二年が経とうとしています。残念なこと最近の二年は思い出と共に、ということになってしまいました。が、今でも何かへまをしたときには「おい、片野、ちょっと来い!」というお叱りの声が飛んでくるような気がします。

先生のことですから空の上からでも、開成バレー部の現役・OB・も

つと広く人生の後輩に、一言二言、いやもつともつと言いたい事があるとおもいます。でもそれは直接先生から伺うことはもう出来ません。われわれ一人一人が先生から教わった、仕込まれたことを自分の物差しを使って後輩・子供たちに伝えなければならぬことと思います。でも一番お礼を言いたいののは、バレーを好きにさせて頂いたことです。本当に有難うございました。



## 恩師を偲ぶ

昭和四十三年卒 結城教仁

中村先生にお会いして、もう四十年になるんですね。私もそろそろ記憶をたどるのが苦手な年代になってきて、顔は浮んでいるのだけれど、名前が出てこないなんてことがしばしば。でも、先生の事となると、一緒に時を刻ませていただいたその時、その時が鮮明によりみがえつてきます。

ある時は熱いまなざしで、またある時は冷めた目で、そして慕い続けた恩師として。

「俺より先に死ぬんじゃないぞ」

そう言つて、疲れた人生を励ましてくださったのに、あまりにも早い訃報。

お見舞いした時、

「もうなにもいらぬ。健康だけを返して欲しい」

とおっしゃられた。何てお答えすればよかったですか。もう、話の続きが出来なくなってしまうでしたね。

「今から写真をまわすから。女房だ・・・ミチコというんだ、どうだ、きれいだろう」

中学一年の保健体育の講義中の事である。好奇心旺盛な子供たちに、格好な話題を提供することとなった。

先生は、タレ目を細くして、鼻をこすりながら照れ笑い。

「俺の女房の作るギョウザは美味しいんだ。食べに来い」

「ごつつあんです」

奥様のこと。ご家族のことを語る時、「人間・中村博次」が、見え隠れする時だった。

修学旅行は、なんであんなに退屈なんだろう。今はだいぶ趣が違つただろうが。我々の頃は、バスでうつらうつら。起こされて寺社見物。京都はなんでこんなに寺が多いの。

「おおい。静かにしろ」

いちばん大声を出して、ひんしゆくを買っていたのは、先生だった。一緒にタクシーに乗った時、先生が放屁。運転手が窓を開けると、

「寒いから閉める」

「いや空気を入れ換える」

「客が閉めると言っているのが聞けないのか」と口論。

「ふざけるな。降りるぞ」

今、乗ったばかりなのに先生。

同年代に中大付属高校のS君がいる。あのオリンピックで活躍した選手である。支部選抜の帰り道、先生はS君に

「天狗になっちゃいかんぞ、天狗に」

バレーボール試合会場等で、開成の生徒同様に、他校の生徒を指導する場面をよく見かけた。

正義感の強い先生、教育者としての信念を持った先生、我々にはそう思っても、知らない人から見ると、誤解されるのではないかとドキドキものでした。

心残りがありません。先生が、

「開成を退職したら、やりたい事がある。その時は、声をかけるから手伝え」

と言われました。何をされようと思っていたのか、わからなくなつて



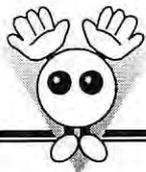
しまいました。聞いておけばよかった。先生の事だから、突拍子もない事を考えておられたのでしょうかね。

「お前、バレーボールをやらんか」

先生に呼び止められてから、授業で、練習で、合宿で、試合で、OBになつて・・・あまりにも多くの事が頭の中でめぐります。先生から熱い情熱を通してご指導いただき、真直ぐに人生を歩んでくれました。けつして忘れません。先生の志を受け継いだ先輩方、同僚、後輩諸君が沢山います。開成バレー部に入って、本当によかった。先生にめぐり合えて、本当によかった。ありがとうございます。

心からご冥福をお祈りいたします。

合掌



## おかげさまで！中村博次先生

昭和四十三年卒 富部直希

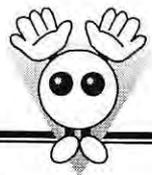
中村博次先生との出会い。それは、私が昭和三十七年四月開成中学に入学し、授業が一巡したところだったでしょうか。現OB会長の結城君に「体育教官室と呼ばれているんだけど一人では行きにくいので一緒に来てくれない？」といわれ、石井君と三人で高校校舎にあった教官室にお邪魔したときが実質的には最初の出会いでした。先生は「君ら二人もか」とおっしゃり、晴れて(?)バレーボール部員となりました。

保健体育の授業中に、奥様の自慢話は耳にたがえるくらい聞かされた気がします。「美知子、美知子が」と奥様のことを話されているときの先生は、本当に嬉しそうでした。また、池袋商業高校時代の友人に税理士という資格を持ち、自分の何倍もの給料をとって仕事をしているやつがいるという話もなぜか印象に残り、その後このご友人の会計事務所にお世話になることに相成りました。

昭和六十年に税理士として独立開業し、先生も大変喜んでくださいました。また、高校時代のクラスメイトのみならず、同期の連中や後輩、先輩からも声を掛けていただき、微力ながらも仕事に邁進しております。

自由業なので時間の割り振りがある程度自分でコントロールできるため、肩書き、資格に関係のないボランティア活動に参加することができ、本当にありがたいことだと思っております。今現在、私がこういう生活を営むことができるのも、中村先生との出会いがあり、その後折りに触れて就職等の相談に乗っていただいたおかげであると強く心にかけています。

最後になりましたが、中村博次先生のご冥福をお祈りし、これからもご供養していきたいと念じます。ありがとうございました。



## 中村先生

昭和四十四年卒 片野昭秀

中村先生。中村先生。

もう返事をしてくだらないのですか。

「返事はでかい声でするんだ。」

と、いつもおっしゃっていたじゃないですか。

中村先生。もう褒めてくれないのですか。

中村先生。もう叱ってくれないのですか。

そんな、そんな先生は考えられません。今一度私達の前にいらしてください。そして、体育館中に響き渡る大きな声でレシーブ練習をお願いします。

褒めてください、しかってください、私達はいつまでも先生の教え子です。

中村先生。

先生と出会ってから三十八年。先生との思いでは一晩かかっても話されないほどもです。そのいくつかを話させてください。

中村先生。

私が中三の夏、都大会と合宿の日程が重なってしまい、中学は高校より先に合宿地の白馬に入りました。そうしていただいた先生のお気持ちにもかかわらず、私達はたるんだ練習をしていました。それが先生の逆鱗に触れたのでしょうか、私達をグラウンドに整列させ、

「おまえがだらしないから、練習もだらしくなる。何のために中学生だけで合宿に来たんだ。」

とキャプテンの私を蹴飛ばされ、本気になって叱ってくれましたね。

宿舎に戻り先生のお気持ちが分かると、不思議に蹴られた痛みは感じませんでした。

中村先生。

高一の夏、開成のグラウンドに十数面コートを作って、国体予選がありましたね。ベスト8をかけての対日大鶴ヶ丘戦でした。13対13で高二の方をさしおいて、私をピンチサーバーに起用してくれました。私は見事にサーブを失敗し、たちどころに交代させられました。ベンチに戻ると先生は一言もおっしゃいませんでした。何もいつてもらえないことが帰ってつらく感じられました。

中村先生。

昔の体育館の横にあった日のあたらないきたない体育教官室。懐かしいですね。そこで、「教師になりたい。」と相談したとき、

「おまえにびつたりだ。やれ。目指せ。」

とおっしゃってくれました。覚えていらつしやいますよね。人間自分の進路を決める際、決心が付かない、誰かに一押ししてほしい、そういうときがあります。担任の先生からも進路指導の先生からも教員志望はやめておけ、といわれたその中で先生の一言がどれだけ心強かったことか、どれだけ励みになったことか。

中村先生。

仲人をお願いしたときのこと忘れられません。駒込のあるお店でした。

「そうか、お前も嫁さんをもらうのか、良かったな。俺には初めての仲人だ。」



と、まるで自分の子どものことのように喜んでくれましたね。あのときのビール、とてもおいしかったです。

中村先生。

二十年前、私が審判の道に入ったとき、

「俺の目の黒いうちによくぞこの道に入ってくれた。ついては、三つこのことを心がけろ。」

と、いつてくださいましたね。

「集合時刻の三十分前に会場に着いていること。」

「何を言われても言い訳をしないこと。」

「高体連の先生と仲良くすること。」

そして、やるからにはA級審判を目指せと……。それもつい昨日のことのように思えます。

中村先生。

お孫さんの徹人君の話をするとき、先生のお顔はコートでは絶対見せることのないお祖父ちゃんのお顔でした。これ以上は下がらないと思うほどに目尻を下げた、にこにこ顔でしたね。

そして、中村先生。

三年前私の家内の告別式では、先生は一番に歩みでてください、棺をもってくださいましたね。忘れもしません。今日はそのお返しで私が先生をもたせていただきます。どうぞいやがらないでください。

中村先生。

病気になるれて十年、主治医の先生も

「この病気でよくここまで頑張ってこられた。すごい精神力だ。」と、おっしゃってましたよ。また、その間奥様のご苦勞も並大抵ではなかったことでしょう。先生はあまりにも忙しすぎました。これからは今までの分もゆつくりなさってください。

中村先生。

先生が四十二年にわたって築き上げてくださった開成学園排球部の伝統を、OB現役ひとつになってこれからも守り育てていきます。どうか安心してお休みください。

そして、6月2日、関東大会では先生も是非ベンチ入りしてください。

それでは、中村先生、さようなら。

平成十三年五月二十九日

開成学園排球部代表 片野昭秀

告別式で弔辞を読ませていただきました。その原稿は奥様にお渡ししましたので、思い出し思い出ししながら書きなおしました。



## 中村先生との思い出

昭和四十五年卒 桑田起義

私にとっての中村先生は、一言で言うと、「心のよりどころ」だったと思います。先生は、二年上の結城先輩の代に大変期待されており、練習の熱の入れ方も相当なものでした。我々はその陰で、一年上の片野先輩のご指導のもと、割合気分的にゆったりやっていました。だから、本当に恐ろしかったのは、先生よりむしろ、合宿に登場される何かの名物OBでした。

先生のコート上でのご指導は、ベースとして「スタンドプレーをするな」というのがあったと思います。手を抜くと、こっぴどく叩かれましたが、こちらの怠慢を見抜かれているので仕方ない、という一種の納得感がありました。

練習も、大体自分達で計画してやっていたので、先生に無理強いされるようなこともなく、良い関係でやっていたと思います（過ぎてしまふと、悪い思い出は薄れるのかもしれませんが）。

だから、試合の時も、先生の采配に大体は疑問を持たずに従う事ができたと思います。一生懸命勝たせようとしてくれることは、いつも強く感じました。

先生がおられると、試合でも練習でも何となく安心感がありました。人間味溢れ、喜怒哀楽がストリートに顔に出て、とにかく一生懸命に我々に向かってメッセージを送ってくれた、そんな先生に、もう開成の体育館に行ってもお会いできない、というのは寂しい限りです。心よりご冥福をお祈り致します。



## 中村先生の思い出

昭和四十五年卒 山本恵一

「ケーコちゃん」、「ケーコ」というのが私の高二から高三のときのあだ名でした。名付け親は覚えていないのですが、この名前を一番よく使っていたのが中村先生でした。最初はかなり抵抗感がありましたが（試合中でもこの名前と呼ぶのですから）、先生があまりに連発するため、いつのまにかなじんでしまいました。

中村先生に直接バレーボールの練習を見てもらえるようになったのは高校生になってからでした。印象に残っている練習はクイックの練習です。先生にボールを手渡しし、私達がジャンプしたところに先生がボールを投げ上げてくるという方法です。クイックのタイミングと感触が良く分かりました。私たちの学年はクイックや時間差、平行といった速攻を多用したのですが、セッターだった私にとり、トスのタイミングや感触を覚える事ができたのはこの練習だったと思います。もう一つはサーブの練習です。落ちるサーブの打ち方を先生自身がサーブを打って教えてくれるのですが、そのフォームが先生らしいのです。膝を曲げ腰を低くし、これぞ「エロジ」というフォームでした。

高二のときは中村先生だけでなく、佐藤先輩にも練習を見ていただきました。大学での練習方法が導入され、レシーブでマッハは取り入れられたのはこの時だったと思います。技術面では佐藤先輩の影響が強かったし、練習に関しても佐藤先輩のほうが先生より厳しかったと思います。しかし、試合では、中村先生は大きな存在でした。中村先生がいるだけで落ち着きます。試合中のタイムアウトの時に先生が何を言われたのかは忘れてしまいましたが、あの目を見ると落ち着きました。新人戦で東京ベスト4に入れたのも先生がいたからこそだったと思います。あの日は確か三試合行ったのですが、最初の試合の一セツ

ト目のチームの調子はひどいものでした。私自身も体が重かったのを覚えています。二セツト目（一セツトの途中かも知れませんが）は私をはじめレギュラーのほとんどがスタメンから外されました。調子が悪かったとはいえ、悔しかったですね。このショック療法のおかげでしょう、その後は駿大を撃破し、駒大付属にはフルセツトのすえ敗れこそしましたが、ベスト4になると同時に、大きな達成感を体験できました。高三までバレーボールを続けてもう一度関東大会にチャレンジする気になったのはこの時の体験が大きかったのだと思います。

先生にはよく怒られました。卒業した後も怒られましたが、恐いと思つたことはありませんでした。真剣に私のことを思つて怒る、励ましてくれる、そういう怒り方なのです。桑田君の帰国が決まり、竹内君の米国勤務が決まったときに、小川君のアレンジで歓送迎会を行い、中村先生にも出席していただきました。その時に大学で講義することになったが、学生が寝てばかりでまいつたと報告したところ、喜んでいただくと同時に学生が寝るのはおまえが悪いと、講義にのぞむ姿勢や教え方についてアドバイスをいただきました。身振り手振りというか、教えるときの先生の迫力や情熱は昔のままでした。

思えば、最後まで怒られ、励まされたままでした。一度で良いから逆の立場になりたかったのですが、できなくなつてしまいました。このことだけが残念でありません（ちよつと悔しいですよ）。先生、いつも励ましていただきありがとうございました。



## 中村先生と8人の仲間

昭和四十五年卒 浜和男

東洋の魔女が金メダルを獲得した一九六四年十月、私のバレーボール人生がスタートした。それはつまり中村道場入門ということであった。中学二年の秋、アジアで初の開催となった東京オリンピックのテレビ放送に釘付けになった。初めてオリンピック競技種目となったバレーボールの女子の大松監督、河西主将、半田、宮本、磯辺、松村、谷田の顔が今でも脳裏に浮かぶ。

東京オリンピックから四年後の一九六八年秋、我々は開成排球部史上空前絶後といわれた東京都ベスト4という快挙をやり遂げたのだ。メンバーは桑田・佐藤・小川・山本・竹内・長嶺・小山そして浜。監督は鬼の大松ならず中村先生だった。その感激は自分自身のバレーボール人生の中で特別な意味をもつことになる。高校二年の時だった。

七人の侍いや八人の侍の顔が揃ったのは中学三年の時だった。当時中村先生の指導は二年上の結城チームに集中していた。先生はその学年担当でもあり、われわれは練習を見て頂いた記憶は殆どない。中村先生が我がチームを真剣に指導され出したのは結城チームが引退した時からだった。高校一年の秋であった。その間は五年先輩に当たる佐藤勇さんにもっぱら面倒を見て頂いていた。それから一年上の片野さんがセッターのチームで小川と山本が控えだったが、二・三回戦は勝てるチームになっていた。高校一年から二年に進学の春休みの合宿に入り漸く八人揃った。我々は徹底的に練習し中村先生も本格的に指導体制に入って頂いた。

夢中になって練習に励んだ。フォーメーションも実に良く研究した。桑田・佐藤のオープンに浜・竹内のセンター攻撃、小川・山本の2枚セ

ッターに代打の切り札長嶺。オールラウンドでマネージャーとしてチームの纏め役の小山と、技術的にも人間関係でも素晴らしいチームが出来上がった。中村先生との一体感と信頼関係もこの時構築された。

それからの快進撃は見事だった。二年連続関東大会出場、私学祭ベスト4、東京都新人戦ベスト4と面白いように勝った。

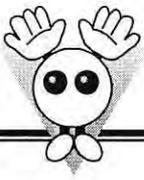
中村先生には徹底的にしごかれた。木棒で殴られ、葉缶の水をかけられ、怒鳴られた。スパルタに反抗しながらも頭脳プレーでコンピネーションを徹底的に追求した。一方我々は基礎トレーニングには努力を怠った。そのつけが新人戦の準決勝で現れた。対戦相手の駒大付属に勝てば決勝進出である。一セット目は開成が取った。メンバーを入れ替えて望んだ試合だがフル出場の浜と竹内が足をつた。体力不足だった。負けた事は残念だったが、しかし後悔はない。我々のスタイルのバレーを追求した結果だからだ。

その日の夜、佐藤さんに連れられ渋谷に繰り出し、制服を着たままピヤホールで祝杯をあげた。ベスト4を素直に喜んだ。

それからの中村先生との付き合いはバレーボールの監督と教え子という枠を超えた。人と人との関係が始まったのだ。八人でよく先生のご自宅にうかがった。最初は駒込だった。近くにうまい麦とろろを食わせる店がありかなり食べた記憶がある。次が落合のご自宅だ。ご自宅ではビールばかり飲まされた。八人の内桑田と小川は中村先生に仲人をやって頂いた。それも有りその後は桑田と小川が中村先生と我々のパイプ役となった。

私の結婚式では中村先生にスピーチをお願いした。こうして家族とのお付き合いも始まった。

先生が亡くなられる前の年、二〇〇〇年三月四日の事だった。桑田の



シンガポールからの帰国と竹内のアメリカへの壮行を祝して八人組が夫婦連れで揃った。その時も先生に参加頂いた。先生はお孫さんの話をしきりにされていた。その顔はただやさしいおじいさんの表情をしていたことが印象的だった。来年二〇〇三年一月十一日、八人の侍の新年会はその時と同じ浅草の「きく田」で行われる。

かつて先生からご子息の就職のご相談を受けた。力になれなかったことが今でも悔やまれる。恩返しが出来ないまま先生と昨年永遠の別れをした。

合掌



## 中村博次先生を追悼して

### 市川開成会のこと

昭和四十五年卒 長嶺義秀

私は昭和四十五年卒業ですが、開成バレー部の高校時代には新人戦東京都四位入賞という華々しい結果を経験した世代です（小川、小山、桑田、佐藤智由起、竹内、浜、山本、長嶺の八名）。故・中村博次先生には中学二年から高校卒業までの開成時代、そして卒業後の大学・社会人時代にそれぞれ思い出があります。

三十年以上の昔となつてしまつた開成時代、レギュラーにはなれなかつたのですが、中村先生にはここぞというときのピンチサーバーやレシーバーとして起用してもらつた記憶があります。自分で言うのも何ですが、おとなしかつたけれども負けず嫌いだったところがあり、卒業後医学部での六年間はバレー部に所属し、念願のアタッカーとしてレギュラーの座を確保してキャプテンも務めました。結局、開成へ大学と十年以上も学生バレーボールをやつてきたわけですが、社会人になつてからは勤務先のバレーボール大会でゲームを楽しむだけになり、年々ジャンプ力が落ちていくのをまざまざと自覚したものです。五年前になりますが、病院のバレーボール大会では老体に鞭打つてアキレス腱を切る経験もしました…。

開成時代の思い出としては、気合いの入つた中村先生のシゴキを受けてヘトヘトになつた記憶が蘇ります。開成の大部分の生徒は中村先生のことを「エロジ」と呼んでいましたが、自分はそう呼ぶ気にはなれず、せいぜい先生を付けて「エロ次先生」と呼ぶのが精一杯でした。しかし、今となつてみるとすっかり中村先生の「愛称」になつていて、むしろ「エロジ」と呼ぶほうがピッタリのような気がします。

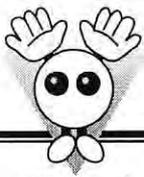
平成十年十一月一日、所属する市川開成会総会で、朝日新聞編集委員

で「ニュース・ステーション」のキャスターだった菅沼栄一郎氏（開成卒）が講演をしたことがありました。そのとき中村先生が教え子・菅沼氏の講演を聞きにわざわざ市川までいらつしたのです。心臓病で倒れたあとですが、ようやく開成に復帰された頃ではなかつたかと思ひます。久しぶりにお会いしたその席で、先生は「おれは死にバグつて榎田に命を助けられた」とさかんに言つておられました。その榎田とは、主治医である国立国際医療センター循環器科・榎田光夫君のことで、じつは彼も四十五年開成卒で、私と大学も一緒に卒業したまさしく高校大学を通しての同期生です。中村先生は「榎田にオマエと会つたことを伝えるから」といつて私の名刺を余分に持つて行かれました。…それが中村先生との最後になつてしまいました。その後、榎田先生から聞いた中村先生の病氣は「拡張型心筋症」でした。これは厚生労働省の指定するいわゆる「難病」にあたります。榎田先生とは最近メールで連絡をとりましたが、そのなかで次のように述べられました：

「何度も心不全で入院され、奇跡的に回復され、動いていない心臓にもかかわらず最後まで教壇に立ちバレー部の指導まで辞めることなく頑張られたのは、氣力と愛校心につきると思います。我は強かつたですが、素晴らしい先生でした。ご冥福をお祈りいたします。」

ここで榎田先生の言つている「動いていない心臓」とは文字どおりにはなく「機能が弱つて十分に働いていない心臓」と理解して下さい。さすがに不屈の中村先生も「難病」という病魔には勝てなかつたのだと思ひます。

今回市川開成会に中村先生をお呼びしたという開成先輩の林繁樹氏（三十八年卒）からも以下のメールをもらいました。少し長いのですがとてもいい内容なので、ご本人の了承を得て紹介させていただきます。



す。

「わたしもあの日と先生にお会いした最後になってしまいました。あの総会に先生をお呼びしたのはたまたま私でした。よほど嬉しかったのでしょうか、何回も何回もお礼を言われてこちらも嬉しくなっていました。菅沼君の事を自慢の教え子として挨拶していただいた事を良く覚えています。あんなに早くなくなられてしまい、せめて市川にお呼びできた事を慰めたいと思います。その年の暮れに久々の年賀状交換が復活し、そこにも又市川に呼んでくれと有りました。そしてそれが私にとって先生の絶筆となりました。」

先生は私が中学三年のとき開成にいらして我々の学年を初めてもたれました。当時はエロジと言わずエッチと言っていました。中村先生が二人になって博次先生は日がいつもついていたからです。

体操部であった私もさんさんお世話になりました。当時の体育教官室は上迫、石橋先生がおられて、それはそれは楽しいところでした。毎日配達されるスポニチを読んで、差し入れの大きな缶に入ったお菓子を勝手にたべるのが日課でしたから。

真島先生が病気になるまで保健体育の授業もままならなくなりました。岩谷ターザン、伊東先生、そしてまもなく小沼先生が着任されました。中村先生は熱心があまってどちらかといえばぶきっちょな先生でした。器械体操の授業はこちらが模範演技をやるのですから、らくなもんです。体操にあまりに熱中し成績が悪化した私を最も心配してくださったのは中村先生でした。体育奨励賞を中高共取らせてくださったのも先生です。バレー部の仲間は山本はち、芥、坂本、一年以上にも坂本、下には沢井。合掌」

最後になってしまった市川開成会でのスナップ写真を会員の方々に問い合わせられているのですが、今のところまだ入手できておりません。

確かにスナップをとったという方が居られたのですが…。

バレーボールに情熱を燃やし、最後まで教師としての信念を貫かれた中村先生、どうか安らかに眠り下さい。合掌。



## 中村先生の思い出

昭和四十五年卒 竹内雄一

中村先生と最後にお会いしたのは、二〇〇〇年三月私が米国に赴任する直前に、昭和四十五年卒業のバレー部の仲間たちとの会食に参加してもらったときでした。その時は非常に元気そうでしたし、訃報を聞いたときは信じられませんでした。

中村先生の思い出はありすぎて、何を書いていいか分からない位ですが、とに角よくしごかれました。岩井の合宿で跳び箱の跳躍板を持ってきて、これをネットの上に持ち上げ、これが相手のブロックと違って、スパイクしろといわれ、これ抜くのは殆ど不可能。レシーブの練習でもぶつ倒れるまでやらされ、こんちくしょうと何回も思いました。中村先生が相手のコートに立って、こちらからスパイクの練習するとき、何とかぶつけてやれといつも先生を狙ってスパイクをしたものです。また試合が終わって仮にそれが勝った試合でも、文句を言われないことはありませんでした。

でも、一回だけ、なにも文句をいわれなかった試合がありました。

高校二年の関東大会の予選会で、この予選会は、丁度学校の運動会と同じ日に開催されました。本来なら学校行事が優先なのですが、先生が皆が予選会に出たいということで学校に掛け合って、かなり揉めたと聞きましたが強引に許可をとり運動会を欠席して出場した予選会でした。先生も皆もこの予選に勝ち抜かないと、運動会さぼった意味がないというような雰囲気でした。聖橋高校で行われたと記憶しますが、どうにか勝ち残ってこれに勝つと東京都でベスト16に残れるその日の最後の試合になりました。相手がたしか城西高校というところで、非常に手ごわい相手でした。関東大会には当時東京都は十二校の出場枠が

ありこの試合に勝つと関東大会出場の可能性が非常に強くなるという重要な試合でした。

一セット目は、12-15で負けて、二セット目は、確か16-14でとつたと記憶しています。三セット目は、相手のペースでやられて、8-13とリードされ、非常に苦しい試合展開でしたが、その時はベンチ含めたチーム全体が絶対に勝つと燃えていました、とにかく、レシーブは拾いまくり、サイドアウトを何回も重ねながら12-13まで追いついた時、浜がレシーブのボンミスをして（浜、ごめんね、僕の方がしょっちゅうミスしてたけど）12-14となり、普段はドンマイというところですが思わず皆でひっぱたいてしまいました。といつても諦めた訳でなく、とにかく拾って、エースの桑田、対角線の佐藤にボールを集め、16-14の逆転勝でした。最後のポイントは、桑田が豪快にきめてしめくりという訳にはゆかず、さすがの桑田も豪快にゆけずフェイントみたいな形できまりました。

この試合の後のミーティングは、何もいわず、ご苦労、解散だけで、どうも涙ぐんでいるように見えました。初めて文句言われなかったこと、今でもその場面が目に見えます。この以降チームのムードが変わり、何か一つ壁を乗り越えたような全員に自信が全員になったのは確かです。棒倒しは三年の一回しか出場できませんでしたが、中村先生の指導がなかったら、あのような自信はうまれなかったし、それはその後の自分の人生にも影響をもたらしていると思います。

素晴らしい経験をさせていただいた、中村先生の思い出は、少年時代の大事なエピソードとともに一生残る思い出です。

ご冥福をお祈り申し上げます。



## 中村先生有難うございました

昭和四十六年卒 西村隆

昭和四十年、小生が中学一年の夏合宿は信州の山奥、信濃四谷(現、白馬)だった。昭和四十二より合宿先は春夏ともに千葉の岩井となった。

先生の目つきは決して良いほうではなかった。生徒への生活指導は、厳格だった。学帽をかぶらないとうるさかった。「おい。こらー。」と服装、身なりに注意を放たれた。いつも大声で注意を放っていた。格好を気にする多くの生意気盛りの生徒から煙たがられた。周りから嫌われようとも悪評が立とうとも、規律違反に対し厳しい目を尖らせた。信念を貫く頑固さがあった。今から思うとそれは、一本筋の通った骨のあるすばらしいご人格なのだ。

高三の夏、とある日の夕方、「おい、帽子をかばんの中に隠せ」と先生から命じられ、学校近くの居酒屋に誘われ、冷たいビールをさし向かいで飲んだ。激しい落差に感動してよかった。

親の手を離れた中学高校時代に良い指導者に恵まれたということに感謝している。

緊張とリラックスを先生は常に心がけておられた。試合に対する真剣勝負、弱いもの、低学年、準レギュラーに対するいたわりと繊細な心遣い。思い出は時の流れとともに輝く。

湯加減、熱い湯ならばやけど、ぬるい湯なら風引き。  
弦の張る具合。強すぎるならば音が出ない。弱すぎれば緩みきった鈍い音。

その辺の機微を先生はしっかりと持ち合わせておられた。勝つための強い執念。厳しい練習。極限にまで挑み、それを乗り越えたときの自信。試合での成果。

自分ひとりの努力ではない達成感。球拾い。声援。先輩の指導。一体となった目標への執念。

先生からは、たくさんの希望と元気と励ましを頂戴した。発育盛り当時の我々と比べたら、年齢・生理的活力に関しては、違っていたかも知れぬが、気力、精神力、人間的な豊かさ、暖かさ、深さは比べ物にならなかった。

眩しさに目を細め空に向かつて手を合わせると、先生の華麗なプレーがまぶたの裏によみがえってきた。バレーボール選手の何たるかをあなたの背中が教えてくれました。

中村先生、ありがとうございます。感謝します。



## 中村先生が三十四歳だった頃

昭和四十七年卒 後閑哲夫

中村先生、私らが中三の頃の先生は三十四歳くらいだったのでしようか。白シャツにブルーのトレパン、あの眼をキラキラさせ、いつもお尻突き出すお得意のポーズで真剣に白球を追っていましたね。中学生から見れば間違いなくオッサンだったけど、考えてみると今の私よりも十五歳も若かったんですね。とても不思議な気がします。先生にとつてあの頃、昭和四十三年ごろってどんな時代でしたか。

バレーボールが男のスポーツとして人気が出始めたのがこの年、メキシコオリンピックで男子が銀メダルを獲ってからではないでしょうか。それまでバレーと言えば、誰もが東洋の魔女と回転レシーブを思い浮かべる女のスポーツで、オレについて来い！の大松監督と選手たちの「スポーツ根性もの」の世界でした。それに対して男子バレーは、従来の根性論とは一線を画した合理的な練習によつて次のミュンヘンオリンピック金メダルに向かって突き進んでいました。特に有名だったのは斉藤トレーナーが開発したトレーニング法です。長さ五メートル位の紐の先にボールをつけて頭上でヘリコプターのように振り回し、その周りで大男たちが飛んだり伏せたりしてボールを避けるといふのです。それからコートの手端から端まで逆立ちで歩かせるというものもありました。筋力と敏捷性が飛躍的に高まったそうです。これも充分「スポ根」の世界なのですが、科学的トレーニングに一步前進したことは確かだったようです。バレーの選手は背が高いだけでなく運動神経が良い、しかも金メダルが期待できる、バスケよりカッコ良いということでも人気が高まりました。当時の全日本メンバーは、セッター猫田、大砲役は大古、横田、南（父親の方）、キューリこと富士フィルムの佐藤。センター森田は今のベッカム様並みのスターでしたね。そ

の他にも斬込み隊長長木村、三森、小泉といった名脇役たちが活躍していました。日本リーグでは日本鋼管と松下電器が常に優勝を争い、専売広島、富士フィルム、旭化成、東レが続いていました。良く覚えています。なにしろ男子の試合のテレビ中継が毎週あり、解説者席の松平隆氏が選手を思いつきり褒め上げるのを耳にタコができるほど聴いていましたから。ところで中村先生、先生が私ら部員を叱ったり励ましたりするときの言い方って、松平さんの口調をパクっていませんか？

開成バレー部でも昭和四十三年は輝かしい年でした。先生が中一の体育を担当したこともあつて、中一（松原君たち昭和四十九年卒）が四十人以上も入部し、高校チーム（桑田さんたち昭和四十五年卒）が東京都ベスト4を達成したのです。その間に挟まれた私ら中三は、さっぱり強くなれない情けない学年でしたが、何故か人数だけは三人から十人に増えていました。

あのころ自分は本当にバレーが好きだったのか、全力を出し切っていたのか、正直なところ当時を振りかえると「負い目」を感じます。先生は恐くて煙たい存在でした。でも卒業してから、同期生の多くが大学の同好会や会社でバレーとの付き合いを続け、勝つ楽しさやプレーすることの解放感に浸ることができたのは開成バレー部と中村先生のお陰です。今にして思えば先生が元氣なうちにOB会に出て、「もつと近い関係で」色々、お話ししていれば良かったなあと思念でしょうがありません。改めてご冥福をお祈り致します。

※昨年末、同期生八名が集まる機会があり、その時の思い出話を久保田、後閑がまとめました。



## 恩師中村先生との思い出

昭和四十八年卒 矢澤俊彦

桜満開の春、開成の制服を着け、学帽を目深にかぶり神妙な面持ちで校門をくぐったのが三十六年前のことである。

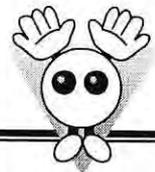
全てが新しいことばかりで希望と不安に満ちた新世界での生活が始まった。そこでいつも一緒に登校してくれた小学校の先輩、稲垣さんが力強い存在であった。クラスの中でも友人が何人かでき始めたころ、中三の先輩方のクラブ勧誘があった。(西村さんが壇上で熱弁したと記憶している) 稲垣さんからの誘いもあり、やったことのないバレーボールをすることにした。それが、中村先生との初めての出会いである。「ホーツ、お前達が新入部員か、先生とパスをしよう。」と喋って一人ずつパスの相手をしてくれた。パスをする度「ホツホツ」と敏捷に動き、楽しそうに相手をしてくれ、全然うまくいかないのに、「なかなか筋がいいぞ!」と誉めてくれた。やさしい楽しい先生だな、というのが第一印象であった。しかし、その思いも日を追うごとに変わっていくとは、一体誰が予想できたであろう。学年が上がるにしたがって、バレーの練習が厳しくなった。先生のバレーボールに対する情熱はコートの中に満ち溢れ、球拾いをしている我々にまでその熱気が伝わってくる。それだけに留まらず、片付けをきちんとし、時間を守れ、礼儀作法はしっかりしろ、学生服のホックが外れてるぞ等々にまで及んだ。今、思うと口うるさい小姑の如く厳しい教育指導をうけた。こんなことを思い出しながら書いてみるとタイムスリップして中学生に戻ったような気分になる。先生との思い出は数知れずあるが、いくつか紹介しよう。

中学生のころの岩井での夏合宿のことである。当時としては立派な体育館があり、高校生は夜の練習があった。我々中学生は、その厳しい

練習を見学できるのである。夜だというのに「ファイト!オー!ファイト!オー!」の高校生の掛け声が体育館に共鳴する中、一層大きな声で「コラーツ!バカモーン!」先生の声がこだまする。今でこそ話せるが、ビンタ、拳骨も飛んでいた。こんなことまで書いていいのか、キャプテンに部員をビンタするよう命令までしていた。多分、殴り疲れたか、手が痛くなったんじゃないかと当時を振り返り推測する。とにかく厳しい先生で、夢中になると我を忘れてのめり込んでしまい、自分の思う通りにしようとする。そこがまた魅力であり、吸いこまれるようにいつのまにか、その中にどっぷり浸かっている自分がいたりする。人を引き付ける摩訶不思議な魅力的な喜怒哀楽の激しい先生であった。

不肖、中学三年生になり立てのころ、どうしてだか覚えていないが、無謀とも思えるメンバーチェンジで高校生の試合に出させてもらったことがあった。一度も高校ボールで練習などしたことがなく、ボールが大きくて思う様にトスが上がらない。何本か立て続けにトスを失敗した時、先生が作戦タイムを取った。「アチャー」と思ったが時既に遅し。中心よりやや左、前頭葉に衝撃が走った。軽い眩暈を覚えたが試合は無情にも進行し、敢え無く惨敗。中学生じゃしょうがないと思っただんどう。試合後は先生も穏やかに迎えてくれた。しかし、前頭葉表面には学帽をかぶれないほど、大きなこぶが出来ていた。自分の思いを単刀直入に素直に表現する裏表のない先生そのものの生き方を見たような気がする。今となると懐かしい思い出である。

もう一つ最後に晩年の想い出を書く。平成と時が変わって何年か経ったころ、先生ご夫妻が当寺へお越しになった。その数年前にバレー部総会で墓地を増設したことを話した。それを覚えてくださったって墓地を一つ分けてほしいとお話であった。お話を伺うと、ご実家の宗



旨と当寺の宗旨は違うのである。すると先生は、「俺が死んだらおまえに拜んでもらえばいいんだ！」そして奥様に「いいだろう！なあ、それでいいだろ。」奥様が「はい。」「先生、私でいいんですか？」「いいんだ！」そんなやり取りがあり、当寺の檀家となった。涙が出るほど嬉しかった。立派なお墓も建立された。それから毎年ご夫妻で不肖の子供たちにお土産持参でお参りに来て下さっていた。

その時は、いつもお孫さんの話で盛り上がりニコニコしながら無邪気な子供のように、はしゃいでおられた。それは、おじいちゃんの写真であり、初めて先生と出会ったときの優しい笑顔であった。

開成在学中だったか、卒業して間もなくの頃だったか忘れたが、先生が開成を辞めて大学へ行く、という噂を聞いたことがあった。しかし、先生は開成に一生を捧げ、バレー部をバレーボールを心から愛した。先生の教育に対する一途な思い。厳しさの中に優しく包み込む思いやりに満ち溢れた心のこもった。ご指導を受けさせていただいたことに深謝し、誇りとします。

心教院法博日嚴居士靈位追善菩提を心より祈念申し上げます。



## 中村博次先生を偲ぶ

昭和四十九年卒 松原秀彰

中村博次先生は、我々昭和四十九年卒にとつては、ひじょうに特別な存在なのである。中村先生がいなければ我々の仲間になかったのである。とにかく、大げさにいえば、両親に次ぐ運命を与えてくれた人かもしれない。

時を昭和四十三(一九六八)年の春に戻そう。あこがれの開成に私達が入学した時である。中村先生は我が学年の四組の担任で、しかも全クラスの体育の先生である。その先生自身が、何と、バレーボール部への入部勧誘をやってしまったのである。

私は、不幸にも(?)、お隣元の四組に属し、身体もでかかったせいで、格好のカモとなつてしまった。両親に聞いたところの話であるが、最初の父兄面接の際、「おたくのご子息はどのクラブに入ろうとしますか?」、「はあ、本人にまかせていますが、小学校の時に剣道をやっていたので・・・」、「私のバレー部にぜひ。去る者は追いませんがね。」この時、私は、ちよつと歪(ゆが)んだ意味のへ去る者は追わずを覚えてしまった。両親は、担任の先生におどされたのでもなからうが、「中村先生もあ言っているし、バレーボールなんて面白そうじゃない。」などという。「バレーなんて女がやるものじゃないか、踊るバレーでもあるまいし、・・・、まあ一回だけでも練習にでてみるか、それで断ればいい、でも断るとあの先生はうるさそうではないやだな、・・・」と私は思っていた。

私が初めてバレー部の練習にでてみたのは、たしか六月頃ではなかったか。少しスロースタートである。さあ、驚いた、驚いた。一年生が何と五十人近くもいるのである。先生は一組分の新入部員を勧誘してしまったのである。コートはおろか、ボールもなかなかさわれない。

玉拾いの壁ができて、それはそれなりに壮観であった。一年生の練習メニューは、ちよつと被害妄想かもしれないが、これまた少し歪んでいたように思う。バレー部の先輩達は、中村先生にアドバイスされたのか、「あまりに新入部員が多いので、ちよつときつい練習をやつて、意気地のない奴は止めさせた方がよい」、ということにでもなったのではないか。でも、先輩方の名譽のために申し上げておくが、ほとんど先輩達は、やさしい、思いやりのある方ばかりである。歪んでいたのは、ほんの少数、少数?

さて、その作戦が功を奏したのか、我々の部員は絞られ、それでも二十人ちよつとに収まったのは、中三ぐらいであつたらうか。私も何度やめようと思つたか、レギュラーになるのが大変なのが一番いやだった。運動神経のいい奴がそろつていたのである。私は、ハンドボール部への転部を、ほんとうに寸前まで考えた。バレー部にどまつたのは、やはり何と言つても同学年の仲間である。実に仲が良かった。バレーだけでなく、いろんなことをいつもいっしょにして遊んだ。野球(テニスボール使用)、卓球、ボーリング、麻雀、花札、キャンプ、スキー、ロック(音楽)、ナンパ(?)、・・・。

我々の学年は、おしなべて、中村先生には従順である。ただし、私のように、表面的には従順であるが、本質的にはそうでないのが何人かいた。私は、一度だけ、先生に猛反発をした。高一の試合(確か正式な何か予選)の時だったか、先生があまりに勝手に、頻繁にメンバーチェンジをするので、いったん代えられて、もう一度コートに戻れと言われたとき、私は先生の指示をポイコットしてしまったのである。私の反発に、先生はそれはそれは驚いたらしい。皆とにかく混乱して、試合は完敗した。試合後、マネージャーの高塚君には、「松原、何て事をしたんだ。中村先生はおまえをキャプテンとして信頼していたの



に！」と泣いて訴えられた。でも、こちらとしては、先生の采配があまりに身勝手に思えたので、いくら生徒といっても、もう堪忍袋の緒が切れたのである。その後、先生はしばらく練習に来なくなった。「松原をキャプテンから辞めさせる」、ときつと思っていただろう。でも、しばらくすると、別のことで先生との仲は、新しい展開に移っていた。

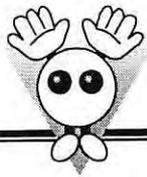
ポイコット事件からしばらくして、先生から、「俺は土日に大学リーグ一部の審判をしているから、おまえも見に来て。キャプテンとして役に立つぞ・・・」これが、私にとって、非常に気持ちのいい体験になったことを説明しよう。その意味はちよつと歪んでいる。大学のバレー、しかも一部リーグの試合を観るのはそれだけでも楽しい。しかし、そういう普通の意味の体験ではない。会場にいくと、先生は私達を、先生の特別のルートから入場させてくれるのである。「こいつらは開成バレー部の連中だ。今日は、ちよつとバレーの勉強させたいので連れてきた。」もちろん無料である。その後が痛快である。大学リーグ一部のそうそうたる人達のところを通り抜けていくとき、彼らは先生に対して、平身低頭で挨拶をし、深々と礼をする。その先生のうしろにくつついて会場にはいつていくのである。先生の審判ぶりは、それだけでも、特集記事が書ける。とにかく先生のジャッジメントの感度とかスピードとか、これは凄かった。今でも脳裏にしっかりと焼き付いている。ただし、先生に睨まれたチームは、不幸な結果となつた場合もあつたように思う。

我々は、高2のとき、東京都のベスト16に入りながら、十三校卒の関東大会選抜に漏れてしまった。その時、先生に思わず言ってしまったことがある。「先生の力でもダメなんですか」。今にして思えば、私達も中村先生へのちよつと歪んだ甘え関係(?)につかっていたのであ

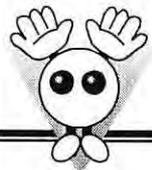
る。この年の悔しさから、高三までバレーを続けた。しかし、ベスト8の壁は厚く、いつもベスト16どまりだった。当時、決勝常連の中大付属(高2秋の新人戦)、駒大高(高三の春)などとあたると、いい試合はするが、結局勝てなかった。先生の監督ぶりは、相変わらずメンバリーチェンジはやや頻繁だが、私(たぶん皆)に不満はなかった。タイムリーな、納得のいく監督采配だった。それまでの我々のチームは、攻撃力は強かったが守備力が弱かった。レシーブ重視の練習にかえ、できるだけ拾って、ボールをつないでいく試合を心がけた。先生に、「俺の好きなチームになつてきた。」といつてもらつた時がある。先生も、強豪校をちよつとドギマギさせて(ただし勝てないのだが)、監督を楽しんでいたように思う。

念願の関東大会選抜に選ばれ、「今年はとにかく最初の枠に入れさせた。」と先生は笑み満々で我々に教えてくれた。関東大会の会場に着いた時、中村先生が、審判の先生方に、「俺は審判で来たんじゃないよ、こいつらの監督だよ。」と我々を指して自慢するのは、私達にも嬉しかった。しかし我がチームの成績というと、やはり初出場では「場」に飲まれてしまい、ミスの連続で一回戦敗退であつた。「高2の時に出ていけば・・・」都ベスト8の壁、関東大会でのぶざまな敗退、我々も、きつと先生も、もう少し勝ちたかつた、あるいは勝つた、という思いは残つた。

卒業以来、仲間は年に二、三度は飲みに集まる。先生には、年に一回は、参加してもらつていた。先生が来れば、座の中心はやはり先生である。先生が身体をこわしてからは、来てもらいたくても叶わず、我々だけの会合になることが多かつた。先生のこと話にならない会合は皆無である。中村先生に教えてもらったことは、数限りない。ほとんどが従順であつたが、時には反発した。先生と我々は、中高の六年



間、バレーボールを通して互いの個性を正直にぶつかりあわせたと  
思う。その思い出はあまりに強烈であり、我々の心の中に先生はいつま  
でも生き続けている。



## 結婚式にお呼びせず、すいません

昭和五十四年卒 熊谷達範

私は、中二までハンドボール部に在籍していましたが、うまく部活動になじめず、バレー部に転部させてもらいました。そのとき、中村先生は「去るものは追わず、来るものは拒まず」とおっしゃって、快くバレー部に迎えていただいたことを感謝しております。その後も高三までバレーのほうは上達しませんでした。中村先生はじめ本当に快くバレー部に在籍させていただきました。

大学生になっても、OBとして中学のチーフをさせていただいたり、バレー部を通じて開成との縁は続けさせていただきました。急に中村先生から電話で開成の実力テストの試験監督を依頼され、懐かしく母校に帰る縁もいただきました。

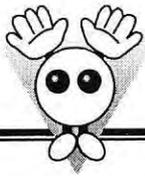
そして、大学卒業後新卒で荒川区立第五中学校に教諭として赴任しました。五中はとても荒れている学校で部活動までまったく余裕のない中学校でした。三年間五中に勤務していましたが、一年目が女子バレー部、二年目が野球部、三年目が女子バドミントン部と校内事情で顧問教師は毎年移動していました。

その荒川五中時代の一年目、私が五中職員室に着席していると、急に後ろから中村先生が「熊谷、元気にやっているか。」と声を掛けてくださいました。なぜ、中村先生が五中に来られたかについては、よくわかりませんでした。私のことまで覚えていただいて本当に嬉しかったです。しばらくして中村先生は来校されませんでしたが、開成バレー部OBのたしか和地君が引率して、荒川五中で開成中対荒川五中男子バレー部で練習試合を一回だけすることができました。

残念ながら、現在勤務している私立川越東高校では運動部の顧問をやる縁がなく、開成バレー部との練習試合もありません。それでも、中

村先生が黄疸で新宿区戸山あたりの国立医療センターに入院された話を関君から聞き、関君と中村先生のお見舞いに行ったとき、ご病氣にもかわらず、中村先生は私が結婚したことを覚えていらっしやあって、「なぜ、結婚式に呼ばなかったのか。」とお叱りの言葉をいただきました。私のような末席のOBのことまで、お世辞でもそのようなことを言っていたきとても感動しました。

現在、私も教員をしていて、一人一人の生徒のことを在学中はもちろん、卒業後も気にするように心がけていますが、とても中村先生のようになれません。それから、母校は卒業生にとって、ずっと一生涯母校です。やっぱり中村先生のいない開成バレー部はさびしい限りです。改めて中村博次先生のご冥福をお祈り申し上げます。



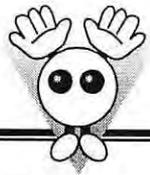
偲歌

昭和五十四年卒 関茂和

空の上 真白き雲をつきぬけて

しっかりしろーと叱るダミ声

合掌



先生「ごめんなさい」

先生。私には謝らなければいけないことがあります。  
昭和五十六年卒 野澤和久

OB名簿をご覧ください。昭和五十七年卒の欄はありませんよね。これは我々昭和五十六年卒の責任、いやその中の私と主将の責任なのであります。申しわけありません。

いったんは入部した後輩数名が退部したのは、主将であった「コエロ」こと中村と私が、練習の仕方をめぐって体育館で大喧嘩をしたことがきっかけでありました。喧嘩の原因はまったく覚えていませんから、たわいない理由であったのでしょうか。練習中には決して出さないほどの大声に目を点にしていた後輩達の呆れ顔だけが記憶に残っています。コエロのことは叱責されたのでしょうか。しかし先生、これは私とコエロの連帯責任なのです。今度お会いしたときは、コエロといっしょに私にも怒鳴ってください。先生、ほんとうにごめんなさい。

ところで先生、そのあとで一杯お付き合いいただいてもよろしいですか。同期の市山、今中、栗村、鈴木、天明にも声をかけます。失礼ながら私を含めた六名は美味しい酒が飲めるだろうと思うのです。なぜなら、中村家の父子喧嘩ほどおもしろい酒のつまみはありませんので。

先生にとつてもっとも指導しにくかったであろう昭和五十六年卒  
野澤和久



## 中村博次先生を偲んで

昭和五十九年卒 清水誠一

中村先生は自由奔放で個性豊かな、いやもつと俗な言葉でいえばちよつと常識外れな先生だった。今でも色々と思ひ出される。

放課後の練習に毎回来るわけではない。でも、たまに来ると、レシーブ練習のコーチ役としていきなり飛び組んでくる。でも普通にはボールを打つてくれない。よくあつたのは、ネットにボールを巻きつけたまま、左右にボールを移動させて、生徒に追つかせさせる。そしてポトリとボールを落として、これをレシーブしろっていう。でも、試合中、ネットに巻きついたままネットの端から端まで動くボールなんてありえない。いったい何の練習だったのか。

試合中の監督振りも普通ではなかった。私が現役だった二十年前は、今のラリーポイント制ではなく、サーブ権があるチームに得点が入る方式だった。サーブ権がある限り、得点こそすれ、失点することはなく、有利な状況にある。これまた今とルールが違うが、任意なタイミングでとれる作戦タイムは、普通、自分達が不利な状況にある、つまり相手側にサーブ権がある場合にとるのが常識であった。ところが、中村先生、貴重な作戦タイムを自分達にサーブ権があるときにとるという「作戦」に出た。自軍の盛り上がりを含めさせ、相手に余裕を与えるだけなのに。

練習後も常識外れのことがよくあつた。中村先生が駒込に住んでいらつしやつた頃、先生は自転車通勤をされていたが、その自転車を先生の自宅まで持つていってくれと、池袋方面に帰宅する私はよく頼まれた。いくら帰る方向が同じだからといつても、生徒を自分の小間使いにするとは何事だと思つたものだ。自転車をこいで先生のご自宅にいくと、先生の奥様が申し訳なさそうにお礼を言つてくださったのを覚

えている。そのとき、お菓子を色々頂ぎ、救われた思いがしたものだ。

練習の後といえば、確か二度くらいだったけれど、西日暮里駅のガードをくぐつた辺りにある、中村先生行きつけの焼き鳥屋に連れて行つてくれたことがあつた。高校生時代の私にとって焼き鳥屋なんて初体験。一口のビールにも、見て見ぬ振りだった。これは、単に先生が焼き鳥を食べたかっただけだったかもしれないが、今思えば、先生の度量の大きさをみせてくれた出来事だった。

そんな中村先生とは、私が社会人になつてからも縁があつた。金融界に就職してバレーを続けていたところ、銀行同士の大会であるインターバンク大会で先生にお会いした。何と、インターバンク大会の顧問をされていたのだ。さらに、先生は、私の勤め先である日銀の体育館をお気に入り、インターバンク大会をいつも日銀体育館で開催したがっていた。二次リーグでも日銀体育館を使うために、一次リーグで負けるなどよくはつばをかけられた。また、幹事銀行になると、顧問である中村先生と打ち合わせをする機会があつたのだが、私も、その打ち合わせに呼び出されたこともあつた。

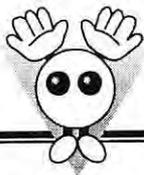
わが同期のバレー部の仲間は、今でも一、二年に一度くらいのペースで会つている。ちようど二、三年前の正月に、我々の集まりに、一度、中村先生をお呼びしようという話になつた。先生とも連絡がとれ、場所は、先生が「じゃあ、開成の前の養老の滝にしよう」ということになり、予約までしていただいた。ところが、当日、我々の仲間が集まつても、肝心の先生が来ない。時間を間違えたかと思つたが、いつになつても来ない。しびれを切らして先生のご自宅に電話を試みたら、何と、先生がいらつしやつた。ちよつと都合が悪くなつたから行けないという。せつかく先生のために集まつてるんだから、ちゃんと連絡



して欲しいと皆で憤慨した。やはり、常識が通用しなかった。もつとも。そのころ、すでに先生は体調を崩されていたのかもしれない。そのとき、電話で、皆で代わる代わる挨拶したが、それが先生とお話した最後となってしまった。

中村先生は型破りな先生だった。ときに先生の自分勝手な行動に遭遇すると、困惑したものだ。しかし、優等生が多い開成の中にあつては、先生の個性が際立っていた。だからこそ、いろんな出来事が鮮明に思い出される。「勉強ばかりしてないで、少しは骨のある人間になれ」と教え続けてくれたのかもしれない。

金融や経済の世界に身を置いていると、このところの閉塞感に悩まされる。でも、中村先生のことを思い出すと、あのちよつとしわがれた声で、天国から叱られているようだ。「おーい、いいかあ。くよくよせず、好きなようにやってみろ。」



## 中村先生の思い出

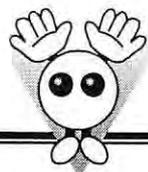
昭和五十九年卒 石賀和義

中村先生についてよく思い出すのは、バレーボールの試合での采配です。私がクラブ活動をしていた頃は、先生はかなり多忙でいらしたようで、放課後の練習に参加されることはありませんでした。また、先生が体育の授業を受けもつこともなかったため、先生の姿は地区予選大会などの試合において監督としてみることが多かったです。私は身長が低くレシーブ要員であったため、試合に出ることはなく、ベンチに入ることがほとんどでした。試合中の先生は、チームが勝っているときは落ち着いているのですが、旗色が悪くなると若干いらしているようでした。チームがピンチになった時、タイムを取るタイミングはうなずけなくもなかったですが、選手交代については、かなりリスキーな交代をするものだなあと感じるものがよくありました。審判として一流のプレーを常にみている先生からすると、私どものプレーに物足りなさを感じて一発逆転を狙ったゆえの采配なのであろうとよく思ったものでした。

もうひとつ、鮮明に思い出すことがあります。OBになってから、後輩の練習に参加した時のことです。練習の後に学校の近くの焼鳥屋に連れて行ってもらいました。学生時代は風紀に厳しく説教の絶えない先生でしたが、一緒に飲むと饒舌で笑い声が絶えませんでした。楽しいひとときを過ごすことができ、この夜のことはいまでもよく思い出します。

社会人になってからはバレーボールをする機会もめつきりなくなりましたが、体調を崩された後でも、最近リベロという制度ができたから、私にまたバレーボールを始めるように伝えるようにと語られていたと人づてに聞きました。あまり覚えのいい生徒ではなかったと思っ

ていましたが、いつになっても気にかけてくれたのだなあと今になって寂寥の念を感じております。ご冥福をお祈り申し上げます。



## 中村先生、本当にありがとうございました

昭和六十三年卒 内田大介

「内田、どうだ、バレーボール部に入ってみないか？」

いわゆる「新高」として開成高校に入学したばかりの私に、当時担任をなさっておられた中村先生が初めてかけてくださったお言葉と記憶しております。中学時代は吹奏楽部に所属し、運動部とはほとんど縁のなかつた私にとって、中村先生からのやや強引な(?)バレーボール部へのご勧誘は大変衝撃的なものでした。ただ、中村先生に誘われるがまま部活を見学に行つて以来、結果として高校二年秋の引退試合まで、私はバレーボール部員として充実した高校生活を送ることができました。もしあの時、中村先生からお声をかけていただいていたければ、高校受験の勉強に疲れて入学した私はどの部活に関心を持つということもなく、ただ漫然と高校生活を送ってしまったていたかも知れません。また、今なお心おきなく話をするのできる同期の仲間を始め、素晴らしい開成バレーボール部の方々とも巡り会えなかつたことでしょう。高校を卒業して十年以上が過ぎた今、あの時の中村先生の一言がどれだけ私の人生に大きな影響を与えたか、改めて痛感させられております。

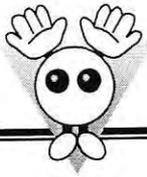
また、高校卒業後も、中村先生はいつも私のことを気に掛けてくださいました。バレーボール部の先輩方からは、以前より「中村先生は生徒の面倒を本当によく見てくださる方だよ。」と伺っておりましたが、正にそのとおりでした。私の人生の節目では必ずお便りをくださり、私が近況をご報告いたしますと、大学入学の時も、就職の時も、結婚の時も、先生はいつも嬉しそうに聞いてくださいました。特に結婚式の時は、ご体調を崩されていたにもかかわらず無理を押してご出席され、祝福してくださいました。確かあの時、中村先生にはスピーチを

お願いしたのですが、こちらが照れてしまうほど私のことを褒めてくださいましたね。バレーボール部ではチームにそれほど貢献できなかった私でしたが、あの時の中村先生のお言葉から私への激励のお気持ちが生かされたと伝わってきて、思わず涙がこぼれたことを今でも覚えております。

このように、何かと私のことをお気にかけてくださった中村先生ですが、中村先生、私は先生に一つお詫びしなければならぬことがあります。それは、三年前に私が勤めていた官庁を退職した時、きちんと私の考えをお伝えに行かぬまま退職してしまったことです。実は、中村先生がお亡くなりになられた後、先生が私の同庁での今後の活躍を大変楽しみにしておられた由、バレーボール部の方々から伺いました。中村先生、ご報告にも行かず勝手に退職してしまい、本当に申し訳ございませんでした。私が後日退職の挨拶状をお送りした際、先生からお電話を頂戴し、「どうしたのだ？何かあったのか？」と淋しそうにおっしゃられたお言葉が今でも耳の奥にはつきりと残っております。決して後ろめたい理由で退職を決意したわけではなく、その旨先生にもご説明はいたしたのですが、「改めてきちんと直接ご報告に行かなければ。」と考えているうち、先生は逝かれてしまいました。

先生、ご心配をおかけして本当に申し訳ございません。でも、ご安心ください。私は今も元気にやっております。退職してからこれまで、必ずしも全てが順調に進んできたわけではありませんが、新たに掲げた目標に向け、自分なりに一步一步近づこうと努力を続けております。中村先生、私は先生に教えていただいた開成スピリッツを胸に刻み、これからも人生を邁進していきますので、どうか温かく見守ってください。

最後になりましたが、これまで中村先生からいただいた数々のご恩に



対し、この場をお借りして改めて感謝の意を表させていただくとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



拝啓 中村先生

平成二年卒 小林哲緒

先生がお亡くなりになってからしばらく経ちますが、先生はあの世と  
いうところではいかがお過ごしでしょうか。私は相変わらず日々働い  
ておりますが、最近は日本も働けるだけありがたいと思わなければな  
らないような国になってまいりました。

今、私の職場では、部署は違いますが私が中学コーチをさせていた  
いでいたころの生徒だった男が働いております。その男は残念なが  
ら途中でバレー部をやめてしまったのですが、よく一緒に飯を食べに行  
ったりしております。また、その男と同じ代のバレー部OBたちとも  
飯を食べ話をする機会がありました。そのときは当然のことながら開  
成のことが話題になり、バレー部や先生のこととも話題にのぼります。  
具体的にどんなことを話しているかはちよつとここには書けません  
が、会話の内容など先生には手に取るようにわかるのでしょうか。そうい  
ったこともあり、最近私は以前よりも開成バレー部のことをよく思い  
出すようになりました。そして、思い出すたびになんだかほつとし  
ます。もう開成に遊びに行っても先生にお会いすることはできなくな  
ってしまいました。何かの機会に諸先輩方や同級生、後輩たちと酒を  
飲んだり飯を食べたりしながら話をしていると、先生のことを思い出  
され、懐かしくなります。

開成バレー部での活動やバレー部を通じての人のつながりは私にと  
っては大きな財産です。特に、コーチをさせていただいたことは、生  
徒たちに教えていたようで逆に私のほうが教えられることの方が多く、  
貴重な勉強をさせていただきました。本当にありがとうございました。  
先生がお亡くなりになって残念ながらひとつ大きな財産が失われてし  
まいましたが、引き続きこの財産をますます大きなものにしていき

いと思っております。

今後機会あることに先生の話などで盛り上がらせていただきます  
が、笑って見ていてください。

では、また。

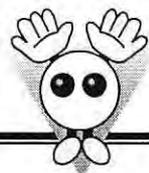


## 「えろじ」の存在感

平成六年卒 今井耕介

開成中高の六年間のほとんどの時間を部活動に費やした僕にとつて、中村先生の思い出はここには書けないほどたくさんあります。中学三年で部員の半数が辞めてしまった僕の学年は、高校一年から入ってき友達を中心にしてチームを組み立てていかなければなりませんでした。そんな僕たちのチームでも、中村先生が辛抱強く面倒をみてくれたおかげで、まあまあ成績が残せ、またなによりも楽しい部活動ができたのだと思います。開成卒業後も、コーチとしてバレー部に携わったため、中村先生には本当にいろいろな面でお世話になりました。コーチ在任中は、昔からの目標であった関東大会出場が、後輩たちの活躍によつて現実味を帯びてくるにつれて、中村先生の健康状態が悪くなつていくような気がして、複雑な気持ちでした。大学卒業後は、渡米したために、先生と顔を合わせる機会が急激に減つてしまいました。開成在学中から、先生は「結婚式には仲人としてでる」とよくおっしゃってくれていたのですが、結婚式の時は体調がかなり悪化していたため残念ながらご欠席されました。先生がなくなられたときも帰国することができなかったのですが、お通夜と告別式に参列した両親と友達から、本当に多くの人がいらしたとのことを聞いて、中村先生の人柄を改めて知ることになりました。

先生との思い出のなかでもすぐに頭に浮かぶのは、合宿での夜更かしや（飲みすぎも？）試合で負けたときに怒られたことばかりです。でも、今でもバレー部の友達と会うと、「あの時えろじがさあ、・・・」という話になるのは、やっぱり開成バレー部そして僕たちにとつて「えろじ」の存在感が本当に大きかったからなのだと実感します。そんな、先生が若くして他界してしまったことが本当に残念でなりません。



## 謎

平成七年卒 依田秀則  
「お前はなんのためにコートに入ってるんだ！向こうの監督に聞いてこい！」

これは、九校リーグの二日目明大中野戦のタイムアウト中に中村先生に言われた言葉である。チームの中でレシーブすることが主な役割であった自分に対して、その役割を再認識させるために発せられたと思われる言葉であるが、後半部分は意味がわからない。もちろん対戦相手の監督に質問することはできず、コーチとしてベンチに座っていた鈴木先輩に聞いてその場は終わった。先生の言葉の半分は今も謎である。

OBになって平成八年の春合宿に行った。合宿中のある晩、中村先生を交えて飲んでいたが、夜も更けてきたので先生は「お前らも早く寝るよ。」と言って寝に行ってしまった。飲み物が無かったので田端先輩等と一緒に外に買出しに出かけた。先生に見つからないように合宿所を出て、ほっと一息ついたところ、前方から自転車に乗った中村先生がやってきた。「早く寝ろよ。」と言って去っていた。寝に行つたはずの先生が海の方向からやってきたその理由は今も謎である。

試合開始直後、審判がサーブの笛を吹こうとしたまさにそのとき、中村先生はタイムアウトを要求した。みんなあつげにとられた。先生はいつもの試合中のアドバイスをくれた。自分も思ったが、チームメイトのみんなも思ったであろう。「試合が始まる前に言ってくれればいいのに。」自分のバレー経験で唯一の出来事である。

このように行動の読めない中村先生であったが、今の自分があるのは開成バレー部のおかげであり、中村先生のおかげである。現役時代は練習をこなすことに一生懸命であり、周りを見ながら練習をする余裕

などなかったが、OBになって余裕ができてから、バレー部における中村先生の存在の大きさを実感することが多かった。

平成七年の夏合宿は先生と一部OBが一緒に部屋で生活した合宿であり、中学チームだった自分は、先生と同じ部屋で寝起きしていた。普段の合宿より、先生と接する時間が多く、色々なお話を伺うことができた。特に毎晩寝る前に先生は話しをなさっていたが、その話の最中に自分は寝てしまっていた。そのときは自分の寝つきの良さを恨むばかりであった。

今の自分の中にある開成バレー部、そして中村先生。これからも大事にして生きていくつもりである。



## 仰げば尊しエロジの恩

平成九年卒 宮利政

「ピンポンピンポン♪ピンポンピンポン♪高二バレー部の宮、体育教官室まで来なさい」

在学中この呼び出しの声を何度聞いたことか。終いにはただピンポンパンポンと二回なっただけで足は体育教官室へと向いていた。しかし、急いで駆け着けたところで、殆ど大した用事などないのだ。

こうして僕の高校生活は知らず知らずにエロジのペースに引きずり込まれて行った。そして、同期からはエロジのお気に入りというありがたいレッテルを貼られ、なんだかやたらと部の雑用を押し付けられたように思う。

エロジからバレーの技術を教わったことは、高校に入ってから殆どない。後輩の指導、部の運営の上で気を配ること、その他生活上の注意など、バレー自体とはかけ離れたことばかり指導されたように思う。試合中ミスが続いてベンチに下げられても、叱ったり技術的に指導するのではなく、気持ちにゆとりをもってプレーしろ、おまえなら出来るはずだ、とその気にさせてコートへと戻してくれた。

しかし、ただ一度だけ、五校リーグで不甲斐ない試合をした時に、ボールを持ったエロジに何度も何度も打ちこみをさせられたことがある。このときのエロジは、体育教官室で見るエロジとは似ても似つかぬ、とんでもなく怖い人に思えた。先輩が泡を吹くまで打ち込みをさせられた、などという話は合宿で聞いてはいたが、心臓病で一度倒れられた後は、そんなに激しく生徒を絞ったエロジは一度も見ることがない。そんだけ俺のプレーがだらしなかったのだな、と肩で息をしながら思った覚えがある。

そんなこんなで関東大会を目指して高三までバレーを続けたが結局

出られず、エロジを喜ばせることが出来ないまま高校を卒業した。

そして、今度はOBとしてエロジとの付き合いが始まった。コーチとして開成に通いつづけた三年間。高校のときはまた違ったエロジを知ることが出来た。

試合の後、練習の後など、よくエロジには飲み連れて行ってもらった。生グレ片手に生徒の指導方法も教えてくれたが、楽しい笑い話の方が多かった気がする。

養老の滝で練習後に、OB同士で飲んでいたら、突然頼みもしないフライドポテト四皿がやってきて、「上の方からです」と言われた。僕たちは、何だ何だと二階へ行ってみると、そこには一杯の酒をゆつくりと味わうように飲んでいるエロジがいた。「ご馳走様です！」とみんなで頭を下げると、片手を挙げてうれしそうにやつと笑った。

その後、僕たちがフライドポテトを注文してエロジに持って行ってもらうよう店員に頼むと、「受け取れないそうです」と僕らの席に戻ってきた…。

なんだか、どうでもいいことばかりが思い出されてしまうが、僕が教師を目指そうと思ったのもエロジがいたからこそである。こんなに面白く、厳しく、そして生徒に好かれもし、憎まれもするエロジがいたからこそ、自分もこうやって生徒と一緒に毎日を通して毎日を通して思えたのだと思う。教師になった後、エロジの開成バレー部と、僕の仕事したチームで試合を試合してみたかった。そして、その後一緒に飲んで色々話をしたかった。この夢はかなわないが、エロジから教わった開成での六年、コーチとしての三年を誇りにしてこれからもエロジのような教師を目指して行こうと思う。先生、どうもありがとうございます。



## 中村先生を思んで

平成九年卒 市原将樹

あのとき、先生の目には確かにきらりと光るものがあつたと思う。あとも先にも僕が先生の涙を見たのはあの時だけだった。

中学二年生の秋。荒川区の新人大会のときだった。一年上の先輩が少なく、一年生の頃から公式戦に出て、一学年上ばかりと対戦していた僕たちが初めて同学年と肩を並べた試合。荒川区で負けるわけではないと僕たちも自信を持っていた。優勝すれば開成にとつて久しぶりの都大会出場とあつてみんな気合いが入っていた。

相手は荒川七中。試合は順調に一セット目をとつたものの、二セット目はとられ、三セット目も七対十四と追い込まれていた。流れが圧倒的にものをいう中学生の試合で客観的に見れば逆転は絶望的だったろう。しかし、痛烈なセンターからのクイックが決まるとあとは一気に点が入り、痛快な逆転優勝を飾つたのだった。

試合後、試合会場の学校の門で整列して先生の話を聞いていたときだった。流れを変えるスパイクを打つた選手を誉めたり、「きょうは勝たないといけなかつたんだ」などという話をしたりしたのだと記憶している。キャプテンという立場がら、先生の近くにいた僕はうるんでいるながらもえもいわれぬものを感じていた。

このときが先生と酒を飲んだ初めての時だった。酒の味も分からない中学二年生を相手に先生は、セッターをあきらめ審判の道へ進んだ自身の大学時代の苦労話を切々と語ってくれた。

僕らが現役の頃の先生は大先輩の頃とはかなり違っていたようだ。それでも、こんなことから先生のバレーへの熱き思いを今思えば強く感じるのである。言葉は悪いが、関東大会をかけた試合でもない、

ただか十校ほどの荒川区での優勝にこれほどの思いで臨んでくれたのかと、そして、それをただかか中学二年生のガキと一緒に喜んでくれたのかと・・・。「書くことは思考することだ」とはよくいったもので、この原稿を書いていて、こんな人物と中学・高校時代に出会ったことに改めて自分の幸せを感じるのである。

こんなことがあつたからだろうか、僕のなかでは、先生のことをいくら愛着を込めても「エロジ」とは呼べなかつた。今でも「中村先生」であり「エロジ」には抵抗がある。あの頑固なほどの情熱家は当世なかなかないのではないかと思う。

とは言いつつも、先生を物語るのに「エロ」抜きにしては語れない。「エロ」というか、「シモ」というか・・・。

中学の時は、よく女子生徒が公立中学の応援に来ていた。その時の先生のはしゃぎっぷりと言つたらなかつた。普段は一応陰に隠れて着替えるのに、女子生徒がいるときに限つてステージの上で女子に見えるようにわざわざスポンを脱いだり、試合中、突然、「おまえら、何だそのぎまは。『金玉』はついてんのか。女の子が見てるかからつて『チンポコ』が別の方向向いていちゃだめだ」などと叫んだりとなんともあつぱれであつた。

しもネタと言えば、これも中学生の時。ステージで大会開会の挨拶に立ち、機嫌がよかつたのか、会場の利用説明をしていたときのことである。「トイレはきれいに使いましよう、真ん中にするように、トイレはセンター攻撃です。」まではまだ中学生の笑いをとつていた。

そのあと、「しっかり、ふんばつてセンターから攻撃するんです。レフト攻撃はだめ、フェイントはちゃんと狙いを定めて。運をつけようと言つて体に『ウン』をつけてはだめです。」などと畳みかけたときはもう冷え冷えとした空気に包まれていた、なんて言う例には事欠かな



い。  
レシーブの基本姿勢の指導の際に、「腰を入れて」などと後ろから腰をたたかれていたかと思っていたら、いつの間にか、足の間から先生の手が伸びてきて股間を握られた被害者は僕以外に何人いたことだろう。

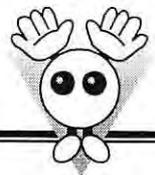
こんな話ばかりでは僕の品性も疑われるので、一番の思い出に移りたい。高校三年の春のこと。関東大会出場へあと二勝、かつてフルセットで負けている相手との最大の山場の試合だった。再び、フルセットにもつれ込み、相手に先に十点目をとられた劣勢の時だった。先生は信じられない選手交代に出た。エースに代えて、高校二年生と一年生をコートに入れたのだ。二年生は僕たちの試合には出たこともなく、一年生は高校に上がってまだ一ヶ月。コートの中の僕は、先生は、次の世代にこの一点を争う緊張感を体験させておこうとこの交代をしたのだと本気で感じた。先生はこの試合をもうあきらめたのだと。それほど、当時のメンバーの実力からは考えられない交代だった。

しかし、この選手起用が見事に当たり、公式戦で初めて打ったも同様の彼らのスパイクが決まり、同点に追いついてしまったのだ。結局試合は二点差で負けてしまったが、このときほど先生の不思議な力を感じたことはない。あの選手交代はどんな優秀な監督でもできなかったと思う。長嶋監督の「カンピューター」と並ぶ、「エロジマジック」だった。所詮は結果論かもしれないが、僕には、最後の最後まで考え抜いた先生の決断だったとしか思えないのである。

まだまだ、先生との思い出はいっぱいあると思う。読み返してみると自分の思い出話みたいになってしまった感もある。ただ、自分の思い出こそが先生を語ることなのだと思う。

後輩が関東大会に出場したとき、先生はすでに亡くなっていた。

関東の場で活躍する姿を本当に見せてあげたかった。先生を連れていけなかった自分たちの代の非力が本当に悔しい。  
大会で優勝するたびに先生が言っていた「今度うちで餃子パーティーをするぞ」というのが実現するのを楽しみにしていたが遂に実現しなかった。しかし、先生の息吹は今、引き継がれようとしている。我が代のエース宮君が、開成バレー部の顧問への道を今、一歩ずつ歩み始めている。自分はコーチもせず、今もバレー部の役に立つことはほとんどできないでいる。しかし、このような素晴らしい同期を持ったことは誇りであり、今後あまり役には立たないだろうが、宮君の支援だけは先生への恩返しのためしていきたいと思っている。  
(文中、何人かの友人や先輩、後輩が登場し、失礼な表現があったことと思いますが、どうぞご容赦ください。)



## 中村H

平成十年卒 金英寛

月日の流れは早いと申しますが、中村先生の御逝去も早や一年半を経過いたしました。ご親族の方々におかれましては、これまで大変なご心労がありましたことと拝察いたします。共に日々を過ごされた中村先生への思いは、いつまでも失われずに温かく残るものでありましよう。

中村先生の亡くなつて以来、私は悲しみとともに先生との日々を想うことがあります。ところがそんなとき、元気はつらつとした先生との日々を思い出しては、そんな先生のエピソードなどに自然と元気を分けてもらえるといったことに気づくのです。

先生は注意の多い厳しい方でした。高校生の頃、ただでさえ練習時間が少ないのに終了時刻が過ぎても練習をしていると、厳しく叱られました。よく先生が校内放送を使って、「えーバレー部、今すぐ練習を終わらせて帰りなさい。」と注意してきたことを覚えていらっしやる方は多いのではないのでしょうか。再三にわたる先生のご注意にしぶしぶ練習を切り上げて帰ったものです。しかし合宿では、逆に先生のご注意に救われました。練習後、砂浜でいつ終わるか分からない浜ダツシュを延々と続けているとき、「コラー！いつまでやってるんだー！もう終わりにしろー！」と叫びながら自転車に乗って登場する先生の存在が、どれだけありがたかったことか。また校内放送と言えば、普段の開成生活においても休み時間などに校内放送でよく呼び出され、バレー部のことに関する様々なお話を受けに行った覚えがあります。先生は常にバレー部のご心配をなさっていたのでしよう。

一方で、試合の監督をなさるときや練習を見てくださるとき、先生はとても熱心に取り組んでおられました。試合中、私たちがつまらない

ミスや情けないプレーをすると、よく先生の雷が落ちたものです。また対戦チームがサーバーチェンジをしてくると、ここぞとばかりに監督がすかさずタイムアウトを取るチームなんて、開成くらいなものではないのでしょうか。この意表を突いた作戦にペースを乱された相手がサーブを外し、開成が流れをつかんだ試合もあったように思います。先生は確固たる信念をもって采配を揮っておられました。また、普段の練習では3レシの真ん中に先生が立つとき、体育館は最高の盛り上がりを見せました。先生にはそんなオーラがあり、あの練習は私たちがとつて特別な意味合いを持っていたのだなと思います。特にネット周りのボール処理のとき、先生が演出するあのいつ落ちてくるか分からないボールに対処できるようになれば、試合で怖いものはあるはずもなく、開成バレー部が伝統的に粘り強い理由はこの練習にあると確信しております。また先生は練習中の生徒のコンディションには特に配慮をされて、決して根性論だけの理不尽な練習はありませんでした。練習中の差し入れなどには先生の優しさを強く感じました。

このようにけじめを大切にして、何事にも熱意をもってぶつかっていたかたは先生の姿を通して、私たち学生が学び取るころは本当に多かったと思います。先生は我が開成学園の伝統的な校風である、文武両道の教育理念を特に重んじ確実に実践されていたのです。よく先生が私たち生徒に「勉強を一番大切にしろ。」「お前たちはバレーボールをするために開成に入ってきたのではないんだ。」とおっしゃっていたのを思い出します。現役のバレー部の学生にとつてみれば、バレー部の顧問であるはずの先生が何故このようなことをおっしゃるのか、疑問に感じたこともあったかもしれません。しかし今改めて考えてみれば先生は、開成学園という恵まれた特別な環境にある私たちの将来を真剣に考えて、まだ若い私たちをさるべき道へと、的確に方向づけてく



ださっていたのだと思います。先生は練習や合宿、あるいは授業などの様々な機会を通して、そんなメッセージを私たちに伝えてくださっていたのです。このような文武両道という教育理念の下で先生はバレエ部を愛し、厳しい中にも熱意をもって、愛情をもって私たちを指導してくださったのだと思います。私は高校二年のときバレエ部で部長を務めさせていただきましたが、先生と接する多くの機会の中で、より多くの言葉をいただき、それらは今でも私の心の中で確かに響いております。先生には語り尽せないほどの感謝の気持ちで一杯です。

私は今でも先生が、あの厳しくかつ温かい目で、私の人生を見守っていてくださるような気がしてなりません。そしてそのように感じるとき、自然と身が引き締まり、頑張らなくてはと思えるのです。先生の教えは今でも私たちの心に生きております。中村先生から賜った愛あるご指導、ご鞭撻を忘れず、先生の愛された開成バレエ部の名に恥じないように、何事にも努力邁進していきたいと誓い、追悼の言葉に代えさせていただきます。中村先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。



## 中村先生と僕

平成十一年卒 石岡宏太

今回、中村先生追悼文集発行ということで原稿を書かせて頂くわけですが、僕と先生の付き合いは約八年であり、諸先輩方の中には人生を通して中村先生と付き合い合われていた方も多数いらっしゃって僕のような者がこの原稿を書くことは誠に恐縮なことではありますが、中学・高校時代を中村先生のバレー部の下で過ごした者として中村先生との思い出を書きたいと思います。

僕が初めて中村先生に出会ったのは体育館の前でした。開成中学に入學し体育館の前をうろちよろしていた僕は、中村先生に「バレー部はここぞ。入れ入れ。」と言われ半ば強制的に体育館に入れられ自己紹介させられたのを良く覚えています。それがやはり何かの縁だったのか、その後、運動会の先輩との関係もあり、僕はバレー部に入部することになりました。

中村先生に関しては、入学当時はとても偉大な人であるというものからちよつと日な先生と言うものまで様々な噂があり一体どんな先生なのだろうと思っていました。学年が進むうちに次第に先生との係わりも増えてきて中村先生のことになんとなくではあります。がだんだんと分かってきました。先生が優しく人間味のある方であることは良く知っていたのですが、同時に、人使いの荒い方であることを高校二年の時に身をもって知ることになりました。僕は高校二年の時にバレー部の部長を務めていたのですが、その時の呼び出しの多さには本当にびっくりしました。普段でも何かと呼び出されるのですが、ひどい時にはほぼ毎休み時間ごとに体育教員室に呼び出され、一度に七、八個もの用件を大事なことからどうでもいいようなことまで思いつくままに(?)口頭で言われたこともありました。これじゃ部長というより

もただの使い走りじゃないか、と思ったこともありましたが、先生を嫌に思うことはなく、そういう先生がいることに安心し、むしろ自分から体育教員室に足を運ぶこともありました。先生にはわがままなところや人使いの荒いところもありましたが、それ以上に人をひきつける優しさや人間的魅力がありました。けれども、先生はその頃から体調を崩されていて、入退院を繰り返していました。入退院を繰り返されてはいたものの、学校にいらっしゃる時は比較的元気(今思えば元気に振舞われていたのかもしれませんが)な様子だったのでそれ程は心配していませんでした。

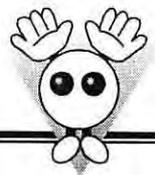
それから卒業後、僕が一浪して不合格になり二浪目が決定したことを先生に報告しに行ったとき、はじめは「ばか者！」などと厳しく怒られたりもしましたが、だんだんとやさしくなり過去の生徒の話などをしながらとてもよく励ましてくれて、そして二浪の後、合格したことを報告しに行ったときには「本当に良く頑張ったな」としみじみとおっしゃられとても喜んで下さったことは一生忘れられません。その頃先生の体調はとても悪く、結局その日が先生と会話をした最後の日となってしまうのです。ただ僕が合格の報告をでき喜んでもらえたことはせめてもの救いでした。

中村先生という方について改めて考えてみると、確かにわがままなところがあったり、一度怒ると周りの意見を聞かず頑固な面もあったかもしれません。しかし、そのことも含めた先生の人間らしさ、人間的温かさに僕たちは何より魅かれていました。生徒一人一人を良く見てとても大事にして下さったり、バレーボールを通して冠婚葬祭等の一生の付き合いができる友達をつくりなさい、などと中学・高校時代に一番必要なことをたくさん教えてくれました。

先生が亡くなられた後、僕は先生と僕の誕生日が同じ日であったこと



先生が亡くなられた後、僕は先生と僕の誕生日が同じ日であったことを知りました。先生と知り合って約八年でしたが、僕は先生の誕生日すら知らなかったのだなと痛感しました。僕は先生のことをどれだけ知っているかわかりませんが、中学・高校時代という貴重な時を中村先生と共に過ごせたことが一生の財産であることに間違いはありません。中村先生、本当にありがとうございました。



## 僕と先生とあの道

平成十一年卒 楓淳一郎

先生がいなくなってから、もう随分と経ちます。先生、お元気ですか。僕は相変わらず大好きなバレエを続けています。僕は毎週一回は必ず、先生のことを思い出します。毎週木曜日、僕はママさんバレエを教え、その途中で先生のお葬式を上げた自性院を通るからです。そんなわけで木曜日は、自転車に乗りながら先生に迷惑をかけたことなどを思い出して、苦笑しているのです。

ある日こんなことを思い出しました。中二の合宿で夕飯後の黙想をしている時、先生は全員に向けて何か注意をしていました。そこで僕は、誰も返事をしていないところで、ふざけて「オツケー」と口走ってしまいました。先生はそれを聞き逃さず、僕に「一時間の正座を命じました。それはそれは、痛くて、恥ずかしくて。でもそのおかげで必ず「はい」と返事するようにになりました。

またある日こんなことを思い出しました。僕は中三の頃、誰かにかぶれて髪を伸ばしていたことがありました。先生は会う度に「何だその落武者みたいな頭は」「今度会う時まで切つて来い」と言っていました。僕は「バレエには支障ない」と意地を張ってなかなか切りませんでした。しかし先生のあまりのしつこさに根負けし、どうせならと思つて坊主にしました。雪の降る屋上で、皆と断髪式をしたあの寒さは忘れられません。

あとはこんなことを思い出しました。高二の春、僕は学校の近くでクラスメイトと酒盛をしており、補導されたことがありました。自宅謹慎が決まってから体育教員室へ行くと、先生が半泣きになりながら「バレエ部をやめろ」と言うのです。「僕からバレエを取ったら何も残りません」なんて漫画の世界だと思つていたセリフが出てきましたが、先

生は許してくれませんでした。その後は仲間たちが必死で嘆願書を出し、先生にお願いしてくれたおかげで、何とか部に復帰することが出来たのです。おかげで今は「開成バレエ部卒」なんて言っていられませんが、あのことは僕の学生生活の中でも一番の大失態でした。先生をたくさん悩ませてしまったこと、今でも申し訳なく思っています。

こんなことも思い出しました。先生のお葬式のことです。弔いに来る人にはガクラン姿の中高生をはじめ、昔の教え子の人などが目立っていたように思いました。先生は休まず教師を続け、本当に多くの人と巡り会い、そしてその一人一人に妥協せず真剣に向き合った、ということでしょうか。そんなことを、お別れに来た皆さんを見ながら感じました。教師つてやりがいのある職業なんだな、と思い先生を羨ましく思いました。

いま僕が教師を目指しているのには、やはり先生の影響が大きかったのだろうと感じます。同じようにバレエ部の顧問になり、熱血指導をして、ゆくゆくは……。今まで八年間、先生の下で学んだことを生かして、これからも励んでいきたいと思えます。先生、これからもお元気で。来週の木曜日、またあの道で会いましょう。



## エロジの思い出

平成十二年卒 川原尊徳

今から考えるとエロジのように、全校生徒から愛称で呼ばれていて「中村先生」と呼ばうものなら誰もが違和感を覚える先生はただ一人だったのではないか。それぐらい生徒と仲のよい先生だった。練習自体に顔を出すことはあまりなかったが、たまに非常に存在感を感じる瞬間があった。校内放送で呼び出しなどをするときである。通常、放送のマイクを前にするとたいいていの人は棒読み口調というかアナウンサー口調になってしまうのだが、エロジは違う。予定の時間になっても部活をやっているときなど、「こらッ！まだ体育館にいるやつッ！早く帰きなさいッ！松尾ッ！」と、妙に臨場感のあるしゃべり方で放送していた。さらに意味もなく松尾の名前を呼んだりして。

それから印象に残っているのが、おもしろい言葉の間違い方である。あるときの試合についてのプリントにはこう書いてあった。「ユニフォーム、タオル、水筒、シューズをもってピロテレーに集合」。少し笑ってしまった。まあこれはよくありがちなパターンである。そしてもちろん水筒を持ってきたやつはいない。

また、「冷たいのを飲むとおなか冷えるから。コンビニとかでジュースとか買わないでアレもってきなさい。アレ。えーっつと・・・テトラポット！」とおっしゃった。テトラポット？つてなんだっけ？防波堤とかに積んであるごっこつしたコンクリートの塊？と考えていたところ、一個下の佐野が「ベットポトルですか？」とナイスフォロー。

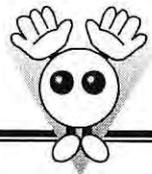
もう一つ。これも試合の時なのだが、「あのバンカーに入ってるアレもってこい」。また難題だ。バンカー？バンカーっていったらゴルフの砂のどこしか思い浮かばないな。いや、銀行のバンクかな？いやまた

よ、バンカーとかいうゲームやったことがあるぞ。バンカー入って何だっけ？とか考えていると、「栗原先生のクルマに、「何だ？バンパーのことか？」「ボールかごはいってるから」。やっとなら！トランクのことか！とわかってみたところで、バンカーとトランクに何の共通性があるのかさっぱりわからない。しかし、よくよくかんがえてみると何かトランクのことをバンカーと間違えることは結構あり得そうな感じがしてきた。なんだろう。何でかよくわからないけどバンカーとトランクには何か共通点があるのかもしれない。

何にしても生徒のことをすごくよく面倒をみてくれた。特にうちは三人兄弟が三人ともエロジにお世話になったので、何かとひいきしてもらった。中学の頃はど下手だったのに一個上の先輩の（余裕の）試合に最後ピンチサーバーで出させてもらったこともあった。あときはとても緊張してサーバーをはずしてしまったのだが、エロジがタイムをかけて先輩に「いいか、みんなサーバーをダブって川原にサーバー回せ」と指示をしたため、全員サーバーをミスっていた。

いまでもバレー部が集まったときなど、エロジのことで盛り上がったりする。

本当に大変お世話になりました。これからもエロジのことを忘れずに生きていきます。



## 中村先生との思い出

平成十二年卒 松尾佑樹

一月か二月ほど前の深夜、副幹事長殿から一本の電話が入り、「今度中村先生の追悼文集を作ることになったから何か書け」とのお達しを下りました。そこで中村先生との思い出などを時々思い出したようには少しずつ少しずつ考えていったのですが、こうして中高六年間と、ついでにバレー部のコーチをしていた一年間とを振り返ってみると、良くも悪くも(?)中村先生色に彩られた七年間であったなと、しみじみと実感しました。

そこでこの七年間を振り返っていきたく思います。試合中のエピソードも、相手のサーバーがかわると必ずタイムをとっていたこと、雑巾だかタオルだかよくわからないもので一人一人顔をごしごしと拭かれて辟易したこと、相手チームの弱点らしきプレーヤーの背番号をよく指で示していたのですがたまに間違えていてその番号の選手がいなかったことなどたつぷりあるのですが、自分自身現役時代は部長として、その後はコーチとして中村先生に深くお世話になったので、ここではこの頃に関するエピソードを中心に振り返っていきたくと思います。

部長時代の思い出は色々ありますが、今一番印象に残っていることをあげるといわれれば、教員室へ異様にたくさん呼び出されたことをあげたいと思います。部長をやっていた時期が、ちょうど先生が退院直後のため授業を担当していなかった頃で、しかも机が体教でなく高校教員室にあった時期であったためなのか、それとも単に呼び出すのが長年の習慣となっていただけなのかよくわかりませんが、よく休み時間に高校教員室へ呼び出されました。しかも、その半分以上は以

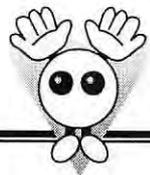
前確かに聞いた用件や、特に呼び出す必要もないのではないのでしょうかと言いたくなるような用件であり、さらに、呼び出されてすぐに教員室へ着いたのに、呼び出した当の本人が不在だったなんてこともしばしばありました。まあ、普通だったらあまり縁のない教員室に堂々と入れましたし、また時々ですが、机の上に置いてあったお菓子をくださったり、食堂でジュースでも買えと小銭をくださったりなんてこともありましたので、今になって思えば、教員室へしょっちゅう呼び出されたことも楽しかった思い出ですが。

部長時代はバレー部的にも波乱万丈の時代だったので、他にも色々先生にはお世話になったのですが、全部書いていると長くなりそうなので、ここでコーチ時代の話へとうつりたいと思います。

前に書いてあるように、卒業後一年間ほどバレー部のコーチをつとめたのですが、おそらく先生の目には相当頼りないコーチとしてうつっていたようで(実際初めの頃は自分でも頼りなかったと思いますが)、よく「もつとでかい声を出さなきゃ中学生はついてこないぞ」などと怒られたものでした。そのおかげか、徐々にコーチ業にも慣れていき、最終的には自分としてはそれなりに任務を全うできたつもりですが、他にコーチ時代の印象的な出来事といえば、一度だけ先生と開成の前にある養老の灌で飲んだことがあります。後にも先にも先生と飲んだのはこの一回きりだったので、今でも非常に心に残っています。その頃はもう体調をお崩しになってたころであまり酒は飲まないよう医者に言われていたそうですが、にもかかわらずけっこうな量を飲んでいました。また、メニニューに載っていない裏メニニューを頼んでいたのですが、ということはおそらくよく通っていたのかと疑問に思った記憶があります。それとなぜかキンキンに冷えた生ビールにさらに氷を入れて飲むという不思議な飲み方をしていました。



とまあ、とりとめのないことをつらつらと書いてきましたが、こころで終わりにしたいと思います。あまり色々書きすぎると天国にいらつしやる先生に怒られそうな気がしますので。最後に中村先生へ一つだけ。僕の名前は松井でなく松尾です。いい加減きちんと覚えてくださいね。



## 先生の呼び出し

平成十三年卒 星野晋平

思えば中学・高校と、中村先生には本当によく放送で呼び出された。中学時代はキャプテン、高校では部長をやっていたので、一日に二・三回呼び出され、そのたびに教員室へダッシュするというのも日常茶飯事であった。

中村先生の呼び出しには特徴があり、おそらく部長経験者の先輩方もそうであったのだろうが、僕はいつのか放送で先生が「二年八組星野君・・・」としゃべり出す前に席を立つようになっていた。たとえば、放送の際に「キンコンカンコーン」というチャイムが二回連続で聞こえたら、それはほぼ間違いなく中村先生の呼び出し放送であった。

このように、毎日のように呼び出されて先生のところへ行き、そこで何をしていたかといえば、実は多くの場合、特に何もしていない。もちろん、仕事を頼まれたり、試合などに関する連絡事項を伝えてくださることもあった。しかしそうではない多くの場合、先生と世間話をして休み時間が終わる、ということが多かった。そしてその話題は、先生の国際審判員時代の話、バレー部の昔話、現役の話、OBの話、学業の話、開成の昔話から最近の話、運動会の話、体育館の話などなど、実に多岐に渡ったし、また、それ以外にも呼び出しにまつわるエピソードは多い。休み時間残り二分で呼び出しがかかり、あわてて行ってみたら「がんばれよ。」の一言だけだったり、内緒でデカピタをくださったり。なんとなんと、呼び出されて五分後くらいに教員室に行ったら、当の先生がその間に帰ってしまってもういなかった、なんていうこともあった。

そして、こうして思い返してみても改めて感じたことがある。それは、

中村先生には本当にかわいがっていたにいたんだな、ということだ。当時は当たり前というか、そのことについてあまり深く考えていなかったのだが、あれだけ毎日気にかけてもらっていたというのは、今考えると本当にありがたいことである。あの呼び出しは、先生の愛情表現の一つであったのだ、と今では勝手にそう思っている。



## 中村先生とバレーボール

平成十三年卒 丸崎玲

色付いた木々の葉も散り、木枯らしに震える季節がやってきた。寒い日には、運動をして体を温めるのが一番よい。私は今でも大学のサークルでバレーボールを続けている。中・高六年間の部活動とは違う余暇としてであるが、最近改めてバレーボールの楽しさを感じている。私とバレーボールとの出会いは、まさに中村先生と私との出会いそのものだった。中・高六年間の思い出。

七年前。憧れの開成中学に入学し、私は意気揚場としていた。そんな私は、これから六年間を共に歩むことになるバレー部に入る。その決め手となった中村先生との出会いは、極めて唐突だった。生物の授業中、校内の植物を観察している時だった。いきなり、誰かから声をかけられた。

「お前、身長はいくつだ？」

「?…え、あ、百八十一センチです。」

戸惑いながらも、私は答えた。

「そうか。よし。バレー部に来なさい。」

声をかけて下さったのは、バレー部顧問、中村先生だった。当時高二だった先輩方、同期の友人からも誘われていたが、前々からバスケ部の人にも誘われていたので正直迷っていた。しかし、最後の最後に私にバレー部入部を決めさせたのは、この中村先生との出会いだった。

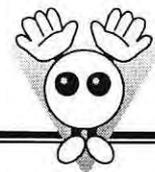
中三。中村先生の推薦で、東京都の選抜合宿に参加させていただいた。身長が一番だったが技術は…。同期の麻布のエースと共に全力を尽くした。合宿二日目。中村先生が練習を見学に来てくださった。いつも以上に気合いが入る。練習後、激励の言葉と共に果物の詰め合わせを下さった。合宿では差し入れが禁止されていたのだが、麻布のエース

とこつそり食べた。大学でたまに顔を合わせる彼とは、今でもたまにこの時のことを話している。懐かしい思い出だ。

高三。悲願の関東大会に向けて挑戦。一日一日が緊張だった。とても強かった四つ上、二つ上の学年ですら成し得なかったこと。とてつもなく大きなものに立ち向かっているような気がした。一試合一試合が今でも目に浮かぶ。スパイク、ブロックが決まるたびに、その調子だ、と声をかけてくださった先生。タイムアウトの際には一人一人の顔をタオルで拭き、励まして下さいました。同じタオルで回し拭きされることが嫌だったのだが、今となってはいい思い出だ。そして、当時ベスト16だったチームに勝利。破顔する先生。このまま関東大会出場を決めたい。リーグ戦になった。残り三試合。一試合目、難無く勝利。二試合目、相手のエースが強かったが辛勝。いける！あと一勝。あと一勝。あと一勝…。最後の試合が始まった。相手が強い。コートの中で現実にもがく。もがく。あがく。あがく。しかし、そのあと一勝はあまりにも遠かった。全てが終わり、余りのことに泣くことすらできなかつた。無力感に苛まれた。先生の落胆する姿に胸が痛む。家に帰って一人で泣いた。悔しい思い出だ。

中国遠征。関東大会予選が終わった後も、同期の星野と私は引退しないで、バレー部に残っていた。そんな私たちに、先生は大きな機会を与えて下さった。東京都私学選抜。中国遠征。受験前ということもありかなり迷ったが、二度とない機会と思いき喜んで行かせていただいた。遠征前の練習、遠征、どれも素晴らしい経験となった。しかし、中でも特に忘れられない一つのこと。それは、夏期私学大会決勝戦の後の選抜メンバーお披露目。星野と私が紹介された時の中村先生の顔は今でも忘れられない。

私のバレーボールにおける中・高六年間の経験は、ほとんど中村先生



---

からいただいたものだったと思う。大きなことも小さなことも、今の私を形成する大きな糧となった。最後になったが、ここに改めて中村先生への感謝を述べると共に、謹んで哀悼の意を表したい。



## 中村先生を偲んで

平成十三年卒 下山真

中村先生がお亡くなりになられてから、ずいぶんと日にちがたつてしまいました。しかし今でも、開成に戻った時には先生がいらつしやるような気がしてなりません。

そんな中村先生との思い出の中で、記憶に深く残っているものを書いていきたいと思えます。

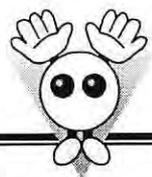
まず始めに、高校に入学して、バレー部に入部することを決め、練習をするようになってしばらくしてから、中村先生のところにあいさつにいきました。すると、先生は話もそこそこに体育館の裏の小さな部屋に自分を連れて行き、紺の開成Tシャツを下さいました。また、始めにいただいたTシャツがぼろぼろになってしまった時には、「本当は、一人一枚だけなんだけどな。」と言われながらも、もう一枚下さいました。その時にいただいたTシャツは今でも部活の時に着て使っています。

次に、自分の中で一番記憶にのこっていることを書きたいと思えます。これは、自分が高校二年の夏の合宿のときのことなのですが、合宿最終日前日の夜におきました。その日は、特に酒を飲んでいただけではなかったのですが、同期の友達と後輩とともに麻雀をしていました。麻雀も盛り上がり、何局か楽しくやっていて、一人がトイレに行ったか部屋に一度戻った時は忘れましたが、その時に事件が起きました。一人が出ていってから少ししたときに、ドアをノックする音が聞こえてきました。自分たちは、戻ってきた奴がふざけてやっているんだなと思っていたら、ドアが開いておもむろに中村先生の顔が見えました。先生は、自分たちが麻雀をしているのを見て、静かに「明日の試合にはでるんじゃない。」と言われました。自分たちはすぐに謝りにい

きましたが、その日のうちは話も聞いてくださりませんでした。そして、翌日の朝にまた謝りに行った時に「旅館の泊まったすべての部屋の掃除をしたら、試合に出ていいぞ。」と言って下さったので、自分たちは急いで部屋の掃除にいきました。ちなみにそのとき一番大変だったのは、OB部屋でした。中村先生の部屋はともきれいで驚きました。あとで聞いた話なのですが、先生が部屋に入ってくる前にドアの前で耳を扉にくっつけて中の様子をうかがっていたみたいです。その姿を想像すると、今でも笑ってしまいます。

このほかにもたくさん先生との思い出がありますが、上手く書くことができそうにないので、先生のご冥福をお祈りして最後にしたいと思います。

中村先生、今まで本当にありがとうございました。



## 中村先生ありがとうございました

平成十四年卒 井口喜弘

エロジと言うあだ名でバレー部の顔である中村先生は今から七年前の五月、仮入部の僕に紺の開成Tシャツをくださったときから僕の心に焼き付いています。あのご高齢にもかかわらず、とても面白い（親父）ギャグは中一の僕には印象的でした。

その後、中学三年間、チーフの方々と中村先生のご指導のおかげで僕たちの代は精神的にも技術的にも、うまくなりました。しかし、中学三年のとき、高校の先輩方が惜しくも関東大会を逃したときに先生は体を壊してしまいました。僕たちは当時、ただ調子を悪くしただけだと思っただけで、実は関東大会に出れないショックが大きい原因だったそうです。それを知ったとき、中村先生の関東大会出場を願う気持ちがいかに大きかったのを知りました。

そして高校へあがるとき、最初二十七人いたはずの同期が八人になって少し寂しくなりましたが、逆にやる気のあるやつだけ残って、練習量が増えたので今考えるとよかったのかもしれない。

そして、僕たちが高二の五月、ひとつうえの代に混じり関東大会予選最終日まで残り、四チームのリーグ戦で二位以上で出場、というときにまず二勝したものの最後にぼろ負けし、二勝一敗でしたが、得失点差のために行けませんでした。

その試合の帰り道、中村先生は顧問をやめるとおっしゃったけれど、試合に出ていた人や観戦した部員やOBと、次にキャプテンになる僕の必死の説得と、「来年僕たちが関東大会に出ます」という宣言で一応顧問は続けなされることになりました。

しかし、前回のようには体調を崩されませんでした。僕たちは関東大会に出れば中村先生の体調はよくなると思いき、がんばって春高予選で都

ベスト16に勝ち残り、関東大会予選でのシードを確保しました。

しかし、五月の関東大会予選が近づくと先生は入院なさいました。僕たちは自分たちの夢のためにも、先輩たちの夢のため、そして中村先生のためにも絶対関東大会にでると心の中で誓いました。

そして、去年と同じ五月四日、まず一敗してしまったもののその後二勝し、二勝一敗で得失点差で関東大会出場を決めました。この感動と報告を中村先生のところへ届けようと、病院へ行ったところ、先生はもう意識がありませんでした。

その後、僕たちは運動会や中間テストなどで忙しく、見舞いに行けないうち、突然中村先生逝去の知らせを受けました。

僕はこのときあまり実感はわかりませんでした。ただ、「エロジが死んだ」という言葉でしか受け止めてませんでした。その後、部活や合宿にOBとして参加すると、何か足りないような気がしてました。やはり、中村先生は僕たちの中で大きなウエイトを占めていました。それに気づいたとき、僕は泣きませんでした。僕たちの関東大会出場の報告は先生に届いていてそれを聞いて安心して亡くなったと思ったからです。ただひとつだけ、一年早く関東大会出場を決めていたら…と後悔します。でも、後悔したら中一からまじめにやっていたら、と後をたたないので、後悔はしないことにしました。

僕たちは開成高校という進学校から関東大会を目指し、中村先生のご指導のおかげで出場したことを誇りに思っています。先生もどこかで喜んでいらっしやっていたはずですよ。中村先生、安らかに眠ってください。



## 中村時代最後の人間として

高校三年生 森禎三郎

僕たちの代がバレー部に入部したとき、中村先生は手術が成功して学校に復帰なさったあとであり、練習に対する方針も体を大事にして無茶はさせないといった感じに変わったらしく、先輩からも、「おまえら楽でいいよな」と言われたりもしました。確かに、思い返してみても中村先生に厳しい練習をさせられたことは殆どありませんでした。しかし、中村先生のバレーに対する思いというのは一向に衰える気配はなかつたような気がします。

中二のとき、試合中疲れて集中力を切らせていた僕は、タイムアウトのときに中村先生に胸をつかまれ、「おまえがそんなんじゃ負けてしまふぞ！しっかりしろ！」と強く、そして熱く怒鳴られたことを覚えています。初めて中村先生に怒鳴られました。それから何度も試合中に怒鳴られ、叱られました。その度に中村先生のバレーに対する熱い思いというものを胸に叩きこまれたような気がしています。

また、先生が亡くなられて、先生の偉大さを多々感じています。特に、部長として仕事をするとき、昔ならば先生がやっていたであろうことを自分がすると、その仕事の膨大さ、忙しさに目が回ってしまうことがしばしばあり、その度によく先生はこのような大変な仕事を今まで一人でなさってきたな、と感心・尊敬しています。

…と今回の文章を書くに当たって中村先生のことを思い出して見て、改めて先生の偉大さ、存在の大きさというものを感じたような気がしました。僕は今年の五月の大会をもってバレー部を引退しますが、残りの短い期間に、中村先生を知る最後の世代の人間として、中村先生から教わり授かったあらゆるものを下の世代の人たちに伝えていきたいと思っています。そして、中村先生のバレーに対する熱い思い、それ

を自分の胸にもう一度思い起こし、新たなる決意と共に、改めて残りの四ヶ月間、頑張ろうと思いました。限りなくゼロに近い確率ではありますが、ぜひとももう一度関東大会出場の報告を先生にしたいと思っています。先生の天国からのご利益を期待しています。





## 夫・中村博次

中村美知子

十一月初旬、バレー部OB会の佐藤様より「先生の追悼文集を五月に作成しますので、一筆お願ひします」との原稿の依頼を受けました。

人前で何かを、という作業は専ら夫の役目で、私は本当に陰にいて夫を支えて行くのが性にあっていました。四十年と数ヶ月一緒に暮らしてきたのですから、書くことはたくさんあるわけですが、いざペンをとることになりますと専業主婦のみで過ごした私には大変重荷でした。でも、夫がなくなり一年半が過ぎようとしておりますのに、開成学園の方々がこのような形でまた夫のことを偲んでくださることを嬉しく思い、感謝申し上げまして拙い文章ですが、書かせていただくことにしました。

夫は、小学校六年のときに母をなくし、父親は戦争で召集されておりましたので、祖母に育てられたそうです。その様な環境で文字通り苦学生さながらにアルバイトを数々経験し、自分なりの理想を掲げて青春時代を過ごしたようです。終戦直後の食糧難には、近郷へ買い出しにいき、「リュック越しにかぼちやがゴツゴツと背中をこするあの痛さと重さは生涯忘れないよ」という話は何度か聞きました。

高三の進路を決める時期には、登校する同級生を校門で待ち伏せて、「これからどうするんだ。」「大学へ行くのか。」「等と皆を質問攻めにして困らせていたと同窓の方々から伺いました。

このころには、やはり青春の悩みが色々とおつたようです。大学時代の寮では空腹のあまり、ご飯を洗面器で炊いて食べたとも聞いています。物の無かった時代を受け止めて成人していったようです。開成学園をこよなく愛し、バレーボールに熱中し、キリンビールを大好物として教員生活を送ったわけですが、大きな声で自分の意思を告

げ、それを貫くことが信条でした。生い立ちプラス性格故、相手の方に合わせる事より、自分の信条で築いていくことに夢中で多々ご迷惑をお掛けしたのではないかと存じ、ハラハラしていました。その考えで、家のなかでは息子が標的となり、期待されライバル心を持った様な可愛がり方で、何度か私とも対立致しました。娘に怒っている姿は二・三度しか覚えておりません。

家の中でもまじめに体を動かすことが好きで、掃除がきちんとできていなくては、と多分学校内と同じようにせつせとガラス窓を磨いたり、庭の植木に丹精こめたりしていました。

孫には好々爺となり、自転車で四方八方家の周りを乗りまわし、銭湯に連れて行くのを楽しみにもしていました。晩年は思う様に動けず、あちらこちらの抽斗の整理をしている姿を見かけました。

仕事中心の自らを省みてか、「君には結婚生活の長年の恩返しをしな」となるとぬけぬけと申してもおりました。

若い頃の夫は、スポーツで鍛えた体が「丈夫で長持ち」を絵に描いた様なひとでしたの。夫は享年六十七才でした。最近の平均寿命を考えますとまだまだ若く、もつと元気でいてほしかった、あと十年は一緒に喜んだり一緒に泣いたり笑ったりして過ごしたかった、と残念な気持ちでいっぱいです。

今は黄泉の国で私どもを見守ってくれていると信じております。夫の魂が安らかであるよう祈ると共に、開成バレー部皆様のおかげで夫の大切な形見の品が出来まして、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



中村先生

長い間お世話になりました。

先生の教えを胸に

これからもがんばっていきます。

先生も空の上から

僕たちのことを見守ってください。

心より先生のご冥福を

お祈り申し上げます。

中村先生追悼文集

平成十五年五月 発行

作成

開成学園排球部OB会

発行責任者

結城 教仁

佐藤 勇

編集

関 茂和

宮 利政

楓 淳一郎

川原 尊徳